「誘拐犯になっちゃいました」

ミヤシタ ケンサク

●（＊主要）登場人物

○植田 勇次（21）…主人公。
金無し、女無し、友達無しで無気力な毎日を送っている。
アルバイトをクビになり、金が尽きかけた時
当たり屋をする事を思いつくのだが。

○遠藤 賢（8）…小学生。
両親が仕事で忙しく留守番が多い孤独な子供。
『賢（かしこ）く』ないから『賢』という名前が嫌い。

○仙道 鉄男（29）…誘拐犯。
弟の直也と一攫千金を狙い、誘拐を実行する。

○仙道 直也（27）…誘拐犯
鉄男の弟で突っ走りやすい性格。

○遠藤 美波（34）…賢の母親。
普段は料理研究家として忙しい日々を送っている。
その為、賢との心の乖離を招いてしまう。

○遠藤 一郎（36）…賢の父親。
IT企業の社長。
金にシビアな性格。

○筧 祥史（36）…一郎の同郷・大学時代の友人で元刑事。

○島川 潔（30）…筧の仲間。というか恋人。

○黒田 甚平（41）…ゴシップ誌のカメラマン。

○濱田 真紀子（59）…勇次の住むアパートの大家。

○大沢 伸（35）…梶健組・組員。
 箕が組から借りた金の催促に現れる。

○真野 富男（33）…梶健組・組員。
 大沢の相棒。

○岩田 若菜（24）…若手人気女優。

○沼田 明（24）…勇次のバイト先の先輩。

○五十嵐 卓也（24）…勇次のバイト先の先輩。

○浜辺 新太（23）…勇次のバイト先の先輩。

○畑 永一郎（67）…ゲートボール好きな老人

1 住宅街 路地（夜）

冬の寒空の下、1人トボトボ歩く
青年 〓 植田 勇次。
十字路に差し掛かった刹那、
『キキキキイ！！』激しいブレーキ音。
勇次 「！！！！？」
その直後に『ドン！！』激しい衝撃音。
勇次が宙を舞い、電柱脇に置かれた
ゴミ袋の山に突っ込む。

2 街（昼）

T・P 『6時間（位）前』
ゴミ収集車が停車し、運転席から
作業着姿の男 〓 沼田 明、助手席から
同じく作業着姿の勇次が降りる。
黙々と資源ゴミを回収する沼田と勇次。
勇次が梱包の解けた雑誌を
そのまま持とうとする。

沼田 「植田君さ」
勇次 「はい？」
沼田 「それ、紐結び直した方がいいぞ」
勇次 「あ。すみません」
丁寧な頭を下げ、黙々と梱包を直す勇次。
沼田 「分かんなかったら聞けよな」
また頭を下げる勇次。
溜息の沼田。

3 走るゴミ収集車

助手席の勇次。
ハンドルを握る沼田が勇次を見やる。

4
ゴミ収集会社

沼田「植田君、年幾つ？」
勇次「え？21です。えっと・・・」
会話が止まり、沈黙の車内。

ゴミ収集車が停車する。
運転席から降りる沼田。

勇次も助手席から降りる。

沼田「んじゃ、30分休憩ね。終わったら仕分けるから」
勇次「わかりました」

沼田はさっさとその場を離れ、喫煙スペースへ
歩いていくと、先に来て煙草を吸っていた
同僚Ⅱ五十嵐 拓也と浜辺 新太と合流する。

五十嵐「よおヌマちゃん、お疲れ」

浜辺「どうしたんすか？つままない顔して」

うんざり顔で口に啜えた煙草に火を点ける沼田。
勇次がその傍を通りかかり、3人が口にする
モノを一瞥するが素通りしていく。

沼田がそんな勇次を見て舌打つ。

沼田「だって、マジつまんねえんだもん」

× × ×

喫煙スペース傍。

(*3人から見えない)自動販売機に
やって来てジュースを買う勇次。

沼田の声「植田って新入りだよ」

勇次「？」

× × ×

煙を大きく吐く沼田。

沼田「前にあいつとシフト一緒だったオッサンいたろ？」

五十嵐「ああ、谷さんだっけ？」

沼田「そうそう。あのオッサンからあいつ最悪って

聞いてたから朝から憂鬱でさあ」

五十嵐「最悪って何が？」

沼田「何がって……まあ、とにかく面白みねえんだよ」

浜辺「ああ。俺も話した事ないけど、それっぽいすよね」

五十嵐「言われてみれば、確かにそんなイメージだよな」

浜辺「なんか理由あんじやないすか？例えば逃亡中の

殺人犯で目立った行動できないとか（笑）」

五十嵐「なんだそれ。逃亡中の殺人犯がバイトすつかよ」

大笑いする3人。

沼田「谷のオッサンも前にあいつと組んだ人から

色々聞いて嫌な印象あったみたいでさあ。

ヤバくね？なあ、俺と代わってくれよ」

顔を見合わせる五十嵐、浜辺。

五十嵐「いや、断る」

浜辺「俺も」

沼田「おい！」

×

×

×

勇次「……」

気を取り直す様にジュースを飲み干す勇次。

そこへ男Ⅱ岸部 和正がやってくる。

岸部「植田君」

勇次「あ。社長」

岸部「ちよつといい？」

手招きする岸部。

その口元は微笑んでいるが、目は笑っていない。

岸部「君、色々評判悪くてさ。ちよつと話そうか」

×

×

×

何やら岸部の言う事を聞いている勇次。

やがて諦めた様に小さく頷く。

5 同表

トートバッグを肩に掛けた勇次が
独りトボトボ出てくる。

勇次「・・・冤罪だって、こんなの」

6 アパート 1F 勇次の部屋 傍々前

力なくやってくる勇次。

勇次「！」

咄嗟に物陰に隠れる勇次の視線の先、
初老の女性Ⅱ濱田 真紀子が勇次の部屋の
チャイムを何度も鳴らしている。

真紀子「植田さん！いないの！？」

ドアを激しくノックする真紀子。
勇次はこっそりその場を離れる。

真紀子「植田さん！植田さん！！」

家賃！払って頂戴！！植田さん！！！！」

7 公園

手を繋ぎ歩く、遊具で遊ぶ、顔を寄せ合い、
笑い合い等多くの母子。

そこから離れたベンチに腰掛け、
その光景を羨ましそうに眺める勇次。

勇次「・・・」

ため息をつき、スマホを手にとると、
バイト情報を開いて閲覧する。
しばらく画面を見ているが

勇次「・・・どうせまたすぐにクビだって」

投げやりにスマホをしまふ。
気を取り直し、トートバッグから

型落ちのノートPCを取り出すと

膝の上で何か作業を始める。

画面の中、特徴的な可愛らしいイラスト

*『架空の動物が寒空の下を彷徨っている』

があり、そこに文章

*『メロはどこにいけばいいのかなやみました』
が載っていく。

が、しばらくして手を止めてしまう。

勇次「・・・どうせ俺のなんか誰も読んでもくれないよ」

勇次の背後をゲートボールステイクを

持った老人⇨畑 永一郎が仲間の老人たちと

通り掛る。

畑 「何してんだい？」

勇次 「(ビクッ) え!？」

慌ててノートを閉じる勇次。

勇次 「いや、大したモノじゃないんで・・・」

畑 「隠す事はないだろうに」

残念そうな表情で去って行く老人たち。

勇次 「(ため息)」

×

×

×

陽が沈み始めている。

園内に人影は無い。

ベンチでトートバッグを抱え、

寝ていた勇次が飛び起きる。

勇次 「寒っ！」

お腹が鳴る。

ポケットの財布を取り出し、中身を見る。

8 駅前 ATM 前(夕)

力なく出てくる勇次。

手にした利用明細票を見る。

勇次「ヤバ過ぎる・・・」
残金は『925円』。

明細票と共に、五千円札1枚と千円札4枚を
財布にしまい、歩き出す勇次。
家電量販店に陳列されたテレビに
目をやるとニュースが流れている。

キヤスター「刑部容疑者はコンビニに入店直後、
包丁で店員を切りつけ、レジから売り上げ金
20万円を奪って逃走しましたが
間もなく逮捕されました」

勇次「(見て)」
キヤスター「警察の調べによると刑部容疑者は

『仕事にありつけず、金が欲しくてやった』
と供述しています。

店員の命に別状はありませんが傷が深く、
現在病院で治療中との事です』
勇次「・・・よく出来んな。そんな事」

9 同アーケード(夕)

牛井屋の前に立ち尽くし、
幟(のぼり)を見つめる勇次。

【牛井・並…税込み448円】と書かれている。

勇次「うーん・・・」

隣の居酒屋に目をやると

【焼き鳥100円】と書かれた
看板が出ている。

10 居酒屋 店内(夕)

カウンターに腰掛ける勇次。
楽しそうに酒と食事を楽しむ学生、
サラリーマン同士やカップル等、
他の客を眺める。

勇次「・・・」

水をがぶ飲みしたところに、

女性店員がやってくる。

女性店員「お飲み物からお伺いします」

勇次「(我に返り) あ、飲み物はいいです。

お冷、お代わりください」

女性店員が微妙な表情を浮かべる。

勇次「？」

女性店員「すみません。1ドリンク制となつてまして」

勇次「え？そ、そうなの？」

慌ててメニュー表を手取る勇次。

【ウーロン茶 200円】に目を留める。

勇次「・・・じゃあウーロン茶を」

女性店員「かしこまりました。お食事はいかがなさいますか？」

勇次「か、皮串のタレを1本で！」

女性店員が、また微妙な表情を浮かべる。

勇次「はい？」

女性店員「あの一、100円の串は、

2本からのご注文をお願いしてまして」

勇次「え？？マジで！？・・・じゃあ、2本で」

女性店員「お後は？」

勇次「え？？お後！？」

当たり前のように聞いてくる女性店員の

視線にプレッシャーを感じる勇次。

それに負け、慌ててメニューに目を戻し

【冷奴 180円】に目を留める。

勇次「じゃあ冷奴を。以上で！」

勇次の大声にドン引きし、去っていく女性店員。

ため息をつき項垂れる勇次。

勇次「ああ・・・マジでどうしょ」

隣の大きな笑い声に目をやると

赤ら顔をした2人の若いサラリーマンが

生ビールのジョッキを手に話している。

サラリーマン①「この前、出張で中国に行ったら『当たり屋』

に遭遇してさあ」

サラリーマン② 「マジ？今でもいるんだ？」

サラリーマン① 「なあ？ビックリだろ？」

こっちが信号でスピード落とした時に、

わざわざ自分から駆け込んで

ぶつかってくんだぜ（笑）」

サラリーマン② 「（笑）そんなのバレッツバレだろ？」

サラリーマン① 「そうなのよ。痛がる芝居も下手くそでさあ。

ドラレコあるからすぐバレンのにな」

サラリーマン② 「どうせやるなら、命懸けでやれっただ」

サラリーマン① 「ホントだよ。上手くやれば元手無しで

慰謝料たんまり稼げんだからさ」

大笑いする2人のサラリーマン。

勇次「・・・・・・・・」

11 夜の国道

車道に向け、立ち尽くしている勇次。

勇次「・・・・・・・・何やってんだ、俺」

右手から一台のSUVがやってくる。

勇次「（見て）！」

震える勇次の手足。

勇次「（呟く）命懸けだぞ・・・・・・・・」

勢いよく近づいてくるSUV。

勇次「（呟く）けど、死んだらどうしよう？」

息を呑む勇次。

直前まで迫るSUV。

勇次「もういいや！どうにでもなれ！！」

×

×

×

立ち尽くす勇次の目の前を

何事もなく通過するSUV。

勇次「・・・・・・・・」

1 2 同近く 人気のない住宅街の路地

勇次「(ため息) やっぱ無理だつて……」
情けない表情でトボトボ歩く勇次。

十字路に差し掛かった刹那、

『キキキキイ!!!』激しいブレーキ音。

その直後に『ドン!!!』激しい衝撃音。

勇次の身体を宙に弾き飛ばした

ハイエースが急停車する。

電柱脇に置かれたゴミ袋の山に突っ込む勇次。

勇次「……う、うぐう」

ハイエースの助手席から、

黒のレインコート姿の大柄な強面男が

降りると勇次に駆け寄る。

勇次「……い、慰謝料貰えますか？」

痛々しい表情で呻くと気を失う勇次。

大柄な男が勇次を抱え上げ、トートバッグを

掴むとハイエースの後部座席に放り込む。

大柄な男「(運転席に) 出せ！」

大柄な男が乗り込むと急発進するハイエース。

1 3 走るハイエース 車内

気を失っている勇次。

痩せた男「なんでそんな奴乗せるんだよ！」

大柄同様、黒のレインコート姿の痩せた男が

ハンドルを握りながら、勇次の隣に座る

大柄な男を振り返る。

大柄な男「馬鹿か! あんなトコに放つといたら

轢き逃げだ!!! そっから足つく訳に

いかねえだろ!!!」

痩せた男「けどよ！」

大柄な男「いいからとにかく走れ！」

1 4 工場地帯 情景

1 5 同 一角 廃工場 前

ハイエースが滑り込み、建物正面の
シャッター前で停車する。
運転席から痩せた男が降り、シャッターを
開ける。

1 6 同 中ノ事務所内

かつては様々な工作機械があつたであろう
広いスペースに入ってくるハイエース。
停車すると痩せた男が再び降り、
シャッターを下ろしに駆ける。

勇 次「う、うくん・・・！」
隣でジッとこちらを見ている大柄な男。

勇 次「うわっ！！」

大柄な男「動けるか？」

勇 次「えっと・・・ここ、病院ですか？」

大柄な男「動けるか？って聞いてんだよ」

勇次に凄む大柄な男。

勇 次「！」

勇次は身体を恐る恐る動かしてみる。

勇 次「ゴ、ゴミ袋がクッションになったみたいで何とか」

大柄な男が突然腰を上げ、座面に

勇次を俯かせると両手を後ろに縛り上げる。

勇 次「え！？ええっ！！？」

×

×

×

大柄な男がハイエースから降りると

痩せた男が戻ってくる。

痩せた男「鉄ニイ、これで安心だな」

大柄な男「バカ。名前で呼ぶな」

痩せた男「あ！ごめん」

レインコートを脱ぎ捨てるとセブンスターを

啜え、火をつける大柄な男Ⅱ仙道 鉄男と

同様にレインコートを脱ぎ、赤マルボロに

火を点ける痩せた男Ⅱ仙道 直也。

直也「弾（はじ）いちまった野郎は？」

啜え煙草の鉄男が、後ろ手に縛られた勇次を

後部座席から引き摺りおろし立たせる。

直也「なんだ。ピンピンしてんじやねえか」

勇次「・・・あ、あの、ココは？」

無視して煙草を吸う鉄男。

直也も勇次を無視してハイエースの後部に回る。

勇次「え！？」

啜え煙草の直也がリアゲートから

少年Ⅱ遠藤 賢を肩に担ぎ出す。

賢は両手両足を縛られ、猿轡を噛まされている。

鉄男「事務所に放り込んでけ」

直也「わかった。おいピンピン野郎、歩け！」

勇次「ピンピン？いや、かなり痛いんですけどー」

直也「（遮り）うるせえっ歩けっ！」

勇次の足を思い切り蹴る直也。

勇次「痛あああっ！は、はい！！」

震える足取りで歩き出す勇次。

その後ろ、賢を担いだ直也が後に続く。

×

×

×

歩く勇次の目の前、プレハブの簡易的な
事務所がある。

直也が勇次を追い越すと、ドアを

開け入っていく。恐る恐る後に続く勇次。

中央に並べられたスチールデスクをやり過ぎ、
その奥の応接セットのソファに
直也が担いでいた賢を下ろし座らせる。

直也「ほら、お前も座れ」

おどおど賢の隣に座る勇次を見下ろす。

勇次「・・・あ、あの」

直也「逃げようとしたら死ぬぞ？」

直也がパンツから出したポケットナイフの
刃先を勇次に突きつける。

勇次「(恐怖で)は、はい！」

勇次の両足をきつく縛り、出て行く直也。

勇次「な、なんなんだよ・・・」

17 同 中

パイプ椅子に座り、2つ並べられた

2×6の長テーブルに両足を乗せ、

煙草を吸う鉄男。

そこへ直也がやってくる。

直也「上手くいったな！初仕事とは思えないぜ。

さすが鉄ニイダ」

鉄男「名前呼ぶなバカ」

直也「あ。ごめん」

鉄男とテーブルを挟んで座る直也。

直也「でもチビの親、マジで警察にチクらねえか？」

鉄男「俺が親なら、あのメモ見て騒ごうと思わねえ」

直也「「そうだな！ホツとしたら腹減ったぜ。

何か食いモン買ってくる」

鉄男「あのチビの分も忘れんなよ」

直也「はあ？食わさなくていいじゃねえか」

鉄男「メモにも書いたろ？約束は守る」

直也「生真面目だなあ」

鉄男「お前が軽薄すぎんだよ」

直也「ところで、あのピンピン野郎どうする？

鉄 邪魔だから殺しちゃうか？」
男「馬鹿言え。殺しは無しだ」
直也「けどよ」
鉄男「あんな野郎殺して、指名手配なんざ割に合わねえ」
直也「じゃあ、どうすんだよ？」
鉄男「あいつの親からも、金踏んだくろうぜ」
直也「そうか！じゃあ、あの野郎の分もメシ買ってくるか？」
鉄男「アイツはいい。アイツの身内には何も約束してねえからな」

18 同 事務所

勇次「ソファに並んで座っている勇次と賢。
隣に並んで座っている勇次と賢。」
賢「（気づいて）？」

勇次「あ」
互いに困惑した挙句、小さく頭を下げる勇次と賢。
ドアが乱暴に開き、鉄男が現れる。

勇次「！」
しゃがみ込むと、息を呑む勇次のポケットを弄り、スマホと財布を取り出す。
鉄男「身の上検査だ」

19 遠藤家前

タクシーが停車する。
後部ドアが開き、美しい女性＝遠藤美波が降りてくる。
美波「あの子、ちゃんとご飯食べてるかしら」
靴から取り出した鍵を
玄関の鍵穴に差し込む美波。

美波「？」

開錠されている。

20 同 玄関くリビング

ドアを開け、中に入ると靴を脱ぐ美波。

美 波「鍵は開けるな、って言ってるのに」

廊下を進み、リビングに入る。

広い室内に息子の気配はなく、テレビは点いたまま、テーブルには手つかずの夕食。

美 波「(憤慨し) あの子ったら」

リビングを出て2Fへ向かおうとする美波。

美 波「ちょっと。まだ怒ってるの？隠れてないで

出てきなさい」

テーブル上のメモに気づき足を止める。

美 波「？」

怪訝な表情でメモを取り上げ、ワープロ打ちの文章を見た途端、その目が剥かれる。

『遠藤様。

才留守ノ間ニゴ子息ヲ預カリマシタ。

クレグレモ警察ヘノ連絡ハナサラヌヨウ。

ゴ子息ニハ食事モトイレモ世話シマス。

5000マンエン払エバゴ子息ハ

カナラズブジニカエシマス』

21 廃工場 中

大量の買い物袋をテーブルに置く直也。

直 也「酒にツマミ、おにぎりにサンドイッチ。それとー」

直也が大きなパックに入った寿司を置く。

直 也「特上だぜ(笑)」

鉄 男「おい。贅沢すんなよ」

直 也「今週、店畳むっちゃうー寿司屋があつてさ。

大将が店前でヤケクソ気味に安売りしてたんだ。

祝勝会だし、いいだろ？」
鉄男「気が早えよ。てか、あの2人呼んで来い」

× × ×

パイプ椅子に腰掛け、ビール片手に
マグロの握りを頬張る鉄男。

鉄男「！美味えな」

賢を担いだ直也がピョンピョン跳ねる
勇次を引き連れて戻ってくる。

直也「ほれ、ここ座れ」

パイプ椅子に賢を座らせ、猿轡と
手の拘束を解いてやる直也。

直也「お前も座れ」

勇次「は、はい」

直也が顎で示した賢の隣に座る勇次。
正面の鉄男が怖い目で勇次を見据える。

勇次「！」

直也「ほら飯。食え」

勇次「あ、すみません。じゃあ、手を解いてー」

直也「(遮り) お前じゃねえよ！」

直也からサンドイッチとジュースを渡される賢。
包装を解くと勢いよくサンドイッチに齧りつく。

それを羨ましそうに見る勇次。

直也「お前は飯抜きだ」

勇次「・・・」

直也は鉄男の隣に腰掛け、缶ビールの
プルトップを開け、一気に呷る。

直也「ぷはあっ！美味えええ」

続けてマグロの握りを口に放る直也。

直也「美味っ！」

それをジッと見て喉を鳴らす勇次。

鉄男「おい」

勇次「(我に返り) は、はい！」

デスクの上にはハイエースから持ち出した
勇次のトートバッグ、更にその中から出した
ノートPC、冊子など。

そこへ勇次から奪った財布とスマホを放る鉄男。
財布から抜き出した運転免許証に目をやり
啜えた煙草に火を点ける。

勇次「・・・」

煙草を吸う鉄男をジッと見る勇次。

鉄男「ん？」

勇次「あ、いや・・・」

大きく煙を吐く鉄男。

勇次がその煙を大きく吸い込む。

鉄男「何してんだ？」

勇次「え？」

鉄男「煙草吸いてえのか？」

勇次「いえ！禁煙してるんで」

鉄男「禁煙？」

勇次「禁煙啓発本を読んで煙草ってやっぱ怖いですし、

お金も無いんで」

鉄男「の割には美味そうに煙吸ってたじゃねえか」

勇次「・・・」

鉄男「名前は・・・植田勇次か」

勇次「はい」

鉄男「年は？」

勇次「21です」

鉄男「住まいは？俺らがお前を拾った辺だな」

勇次「はい」

鉄男「21じゃ、一人モンか？」

勇次「はい」

鉄男「生まれは？」

勇次「埼玉です」

鉄男「近いな」

顔を見合わせる鉄男と直也。

鉄男「じゃあ、親は埼玉にいるんだな？」

勇 次「えっと、分かりません」
鉄 男「あ？」
直 也「再び顔を見合わせる鉄男と直也。
直 也「分からないってどういうことだ？嘘はやめとけよ」
勇 次「う、嘘じゃないです！聞いてないんで」
鉄 男「？」
直 也「聞いてないってどういう事だ？」
勇 次「・・・俺が家を出た後、県外に
引越したみたいで」
鉄 男「なんで息子のお前に行き先言わねえんだ？」
勇 次「・・・中学の頃、父親が再婚して・・・
鉄 男「その、再婚相手と俺が・・・」
鉄 男「上手くいかなかったのか？」
勇 次「（頷き）・・・それで父親とも」
鉄 男「お前、追い出されたのか？」
勇 次「自分から出ました。新しく子供も出来て
俺の事なんて邪魔だろうから・・・」
直 也「・・・」
鉄 男「・・・いつからだ？」
勇 次「はい？」
手にした缶ビールをデスクに叩きつける鉄男。
中身が派手にぶちまけられる。
鉄 男「聞き直すな！」
勇 次「は、はい！」
鉄 男「てめえみてえなオドオドした野郎、
大っ嫌いなんだよ」
勇 次「・・・」
直 也「直也が笑うとコハダの握りを頬張る。
直 也「てか、鉄ニイを怒らすなよ。チョーパン食らうぞ？」
勇 次「チョ、チョーパン？」
直 也「頭突きだよ。鉄ニイのは世界最強だからな。
前に食らったヤクザ者がギャン泣きしたんだぜ」
勇 次「（息を呑み）」

空になったビール缶を直也の額にぶつける鉄男。

直也「痛っ！」

鉄男「名前呼ぶなって言ってるんだろ！」

直也「あ！ごめん！」

新しい缶ビールに手を伸ばす鉄男。

鉄男「いつ家出たんだ？」

勇次「・・・高校2年の時に。学校は中退しました」

鉄男「それ以来、一度も両親と会ってないのか？」

勇次「はい。というか、両親じゃないです。」

片方は・・・戸籍上の母親は赤の他人なんで

鉄男「どっちでもいいだろ！」

勇次「すみません！」

直也「おい、恋人はいねえのか？」

勇次「いません。モテないんで・・・」

直也「だろうな。じゃ、友達は？」

勇次「・・・いません。人に好かれる

タイプじゃないみたいで」

鼻で笑う鉄男。

鉄男「ナヨナヨしてっからだ」

直也「な、ならよ。仕事の上司や先輩後輩で

勇次「お前の事、可愛がってる奴とかは？」

「・・・フリーターでして、今日クビになった

アルバイトでもそういう人には巡り合わずで」

冊子を手にし、ペラペラ眺める鉄男。

鉄男「なんだ。本職かと思ったが、フリーターかよ」

閉じた冊子をテーブルに放る鉄男。

直也「(見て) 絵本？お前が作ったのか？」

特徴的なイラストに載ったタイトルと共に

『さく・えうえだゆうじ』とある。

勇次「まあ・・・」

直也「(少し感心して) 見た目だけじゃ、

分かんねえ事もあんだな」

賢も食べる手を止め、直也と同様に

興味深そうに冊子に注目する。

鉄 男「まあ、お前が何してようが構わねえが嘘は言うなよ？」
直 也「(我に返り) おっと、そうだー」

ポケットナイフの刃先を勇次に突きつける直也。

直 也「嘘ならただじゃおかねえぞ!？」

勇 次「!う、嘘じゃないですって!!」

鉄 男「(直也に) よせ」

直 也「・・・ちっ」

ナイフを仕舞うとかぶりを振る直也。

直 也「くそっ! 身代金取ろうにも、金払う人間が

いないってよお。こいつ生きてる価値ねえわ!」

膝の上で拳をギュツと握る勇次。

勇 次「・・・俺なりに頑張ってるんですけどね」

直 也「孤独に生きてるわりにや反抗的じゃねえか」

勇 次「孤独な人間は下向いて生きなきゃ

いけないんですか?」

直 也「ああっ!？」

鉄 男「・・・」

直也がまたポケットナイフを出すと

身を乗り出し、勇次の胸倉を掴む。

勇 次「(慌てて) いや! 言い過ぎました!!」

鉄 男「よせって言ったろ!」

勇次を突き放し、渋々ナイフをしまう直也。

直 也「二度と舐めた口きくんじゃねえぞ?」

勇 次「・・・」

賢が残りのサンドイッチを勇次に差し出す。

勇 次「?」

賢 次「一緒に食べよ」

勇 次「!」

直也が身を乗り出す。

直 也「こら、ガキ。それはー」

戸惑いながらサンドイッチを賢の方へ戻す勇次。

勇 次「俺が食べたなら、君の分が減っちゃうから」

賢 次「いらなの?」

勇 次「大丈夫だから」

鉄男・直也「……………」

2 2 遠藤家リビング

テーブルに腰掛け、蒼ざめた表情で
メモをジッと見つめる美波。

美波「……………」

美波の夫∥遠藤 一郎が急ぎ足で帰ってくる。

一郎「遅れてすまない。打ち合わせで

都内にいなかったんでな」

美波「……………」

立ち上がった美波からメモを受け取る一郎。

目を通したその顔が憤る。

一郎「くそっ！」

スマホを取り出す一郎。

その腕を慌てて掴む美波。

美波「何するの？警察には電話しちゃダメ！」

一郎「けどな——？」

何か考える一郎。

一郎「……………警察じゃなけりやいいんだろ？」

美波「？」

2 3 スナック『Thanatos』 傍

寒空の下、安物のブルゾンに身を包んだ

強面の男∥寛 祥史【よしふみ】が

耳に当てていたスマホを外す。

寛 「ちっ」

踵を返し、看板の出ていない店へ

右足を引き摺りながら歩いていく。

2 4 同 店内

ドアを開け、客のいない店内に戻ってくる寛。

カウンターのの中、瘦身の身体に
青白く美しい顔に乗せた男。島川 潔が
寛に笑顔を向ける。

島川 「随分長話だったな。誰？」

寛 「大学時代のダチだ。田舎も同じだよ」

島川 「へえ」

島川の正面、カウンターに

ドカッと腰を下ろす寛。

煙草を口に咥え、ポケットを探る。

寛 「ライターくれ」

島川 「使いかけでよけりや」

島川が店の名前が入った

1000円ライターを寛に手渡す。

島川 「ダチは何やってる人よ？」

寛 「今時のベンチャーIT企業ってヤツだ。

聞いた事ねえか？JOYグルメってサイト」

『カチツカチツ』煙草に火を点ける寛。

島川 「あれか。美味い店教えてくれるサイトだろ？」

評判いいって聞いた事ある」

寛 「その創業者だ。最近ビジネス誌とかにも出てる」

島川 「へえ。で、その羽振りのいいダチが何の用よ？」

大きく煙を吐き出す寛。

寛 「今すぐ家に来いとよ」

島川 「何しに？」

島川が2つのコップに瓶ビールを傾ける。

寛 「金借りててよ。どうせまた催促だ」

島川 「初めて聞いたぜ。幾ら借りてんだよ？」

コップを呷る寛。

寛 「(あっさりと) 1000万」

島川 「1000万!？」

寛 「驚くんじゃねえよ。そっちだって

商売が上手くいってりゃ返せたんだ」

島川 「そっち？」

寛が苦い表情で齒軋りする。

寛 「気前よく貸したくせにギヤアギヤ喚きやがって」

コップを呷る島川。

島川 「大丈夫か？」

寛 「ああ」

短くなった煙草を灰皿で押し潰し、立ち上がる寛。

寛 「悪いな。せっかく早めの店終いしてくれたのによ」

島川 「気にすんな。帰ってきたら続きやろうぜ」

掌を差し出す島川。

寛 「ああ」

島川の掌を握り、名残惜しそうに離す寛。

25 同 近くの道

右足を引き摺り歩く寛。

寛 「くそっ。イラつくと、古傷が痛みやがる」

タクシーを止めようと手を上げると

目の前に黒のリムジンが停まる。

助手席から黒スーツ・ノータイ姿の

長身男Ⅱ大沢 伸、運転席から大沢と

同様の服装をした恰幅のいい男Ⅱ真野 富男が降りてくる。

寛 「！」

寛の前に立つ大沢たち。

大沢 「寛さん。いつになったら返済してくれるんですかね？」

煙草を啜え、100円ライターで火を点ける寛。

寛 「4000万は簡単じゃねえからなあ。金が出来たら」

一服して煙を大きく吐き出す寛。

大沢 「・・・」

真野が寛に詰め寄る。

真野 「ホント落ちぶれたなあ、元刑事さん。

大金借りて始めた事業が失敗しちゃって

今はしがない探偵業とはよ」

寛 「・・・」

真野「強盗でもして、さっさと金作ったらどうだい？」
笑う真野。

真野「あ。でもあんた、その足だから
アクティブな事無理か？」

真野の鼻先に拳を打ち込む筧。

真野「ぶはっ！」

血が噴き出る鼻を押さえ、

呻きながら膝まづく真野。

筧「フザけてんのはそっちだろ？暴力団。

アホな利子で人の借金嵩（かさ）ませやがって」

真野の頭上に煙草の灰を落とすと

大沢を威嚇する様に睨む筧。

大沢「オヤジ（組長）だから、あんたみたいな人に

大金貸してくれたんですよ。返さなきや

嵩むのは当然でしょう」

筧「けっ」

唾を吐く筧。

大沢「オヤジもいい加減怒り狂ってますから」

「何度も言わせんなって梶谷のオヤジに言っとけ。

俺が現役の頃、どんだけ付度してやったと

思ってたんだ？ってな」

大沢「自分で言いに来たらどうです？」

「あ？」

大沢「もう充分仁義は尽くした。オヤジはそう言ってます」

「・・・」

大沢「来る時は金も忘れずに。でないとー」

「（遮り）でない、何だ？具体的に言ってみろ」

大沢「オヤジはあんたに対する方針を固めたって事ですよ」

「・・・」

大沢「オヤジからの言伝です。2日待ってやるんで

必ず持ってこい、との事です」

大沢と立ち上がった真野が共に

リムジンに乗り込み、走り去っていく。

筧「くそがっ」

26 廃工場 中

椅子に腰掛けた鉄男が煙草を吸い、缶ビールを呷る。

テーブルを挟んで座る直也が

鯖の握りを頬張ると不満げな顔を向ける。

直也「てか、あの使えねえ奴どうすんだよ？」

金も取れねえなら置いといたってしようがねえじゃん。

やっぱ殺しちまおうぜ」

鉄男「俺らがやる事はチビの親から金をせしめる事だ。

それまで余計な事はしたくない」

直也「けどよー」

鉄男「(遮り)金の事を第一に考えろ。

あの野郎の事は、それが済んでからでいい」

27 廃工場 事務所

両手足を拘束され、並んで座る勇次と賢。

勇次「・・・あのさ」

賢「え？」

勇次「えくと、サンドイッチありがとう」

賢「え。でも、食べてないし」

勇次「いいんだ。嬉しくてさ」

賢「嬉しい？」

勇次「恥ずかしい話だけど、人に親切にされたのなんて

久しぶりでね」

賢「ふくん」

素っ気ない賢。

勇次「いや、かなり喜んでんだけど・・・」

賢「お兄ちゃん、名前は勇次って言うんでしょ？」

勇次「俺？そう。君は？」

賢「賢。遠藤賢」

勇次「賢か。カッコいいね」

賢 「全然良くないよ」

勇 次 「え？」

賢 「『賢い』って書いて『けん』だけど、僕は全然賢くないんだ。勉強嫌いだし」

言葉に詰まる勇次。

賢 「お兄ちゃんは自分の名前、気に入ってる？」

勇 次 「え？（考え）そういえば気に入ってないかもな」

賢 「一緒じゃん」

勇 次 「『ゆうじ』の『ゆう』は『勇氣』の『ゆう』

って書くんだけど俺、勇氣なんて全然ないからなあ」

自嘲気味に笑う勇次。

勇 次 「親も何でこんな名前つけたんだか」

賢 「ねえ。本当のお母さんは？」

勇 次 「・・・死んだ」

賢 「・・・そうなんだ」

悲しげな表情の勇次。

勇 次 「俺にとつての母親はあの人だけだから」

賢 「だからお父さんや新しいお母さんと

仲悪くなっちゃったんだ？」

勇 次 「うん」

賢 「僕もだよ」

勇 次 「え？」

賢 「お母さんはいつも仕事で僕は毎日一人でお留守番。

晩御飯はいつも一人」

勇 次 「・・・」

賢 「今日もお母さんと喧嘩したばかりなんだ」

勇 次 「お父さんは？」

賢 「お母さんと一緒。いつも遅い。

それに本当のお父さんじゃないし、

僕の事なんて絶対、好きじゃないんだ」

勇 次 「・・・」

直也がビール片手にガラケーで
ニュースサイトを見ている。

鉄男「何見てんだ？」

直也「やっぱ心配でき。ガキが攫われた事、ニュースに
なってるねえだろうな？って」

鉄男「馬鹿。大丈夫だ」

直也「ああ、大丈夫だった。だから今は

芸能ニュース見てる。あ！里穂ちゃんが

You Tubeと熱愛！？アホか！

こういう知りたくもねえ情報載せんの、

マジでよせよな！！芸能マスコミの野郎！！！」

ため息を吐き、缶ビールを口に運ぼうとした

鉄男が小さく笑いだす。

直也「何が可笑しいんだよ！？俺は今、ショックなんだぜ？」

鉄男「アイドルなんかの事じゃねえ」

直也「あ？」

鉄男「ガキの頃、お前の為にくすねたパンを

逆にお前がくれようとしたことがあったよな」

直也がガラケーを放る。

直也「さっきの見て言ってるのか？やめてくれよ。

昔なんか思い出してもいい事なんか一つもねえだろ」

鉄男「・・・そうだな」

取り出したガラケーに

ボイスチェンジャーを繋ぐ鉄男。

29 遠藤家 リビング

一郎「！」

ソファに腰を沈める一郎のスマホが鳴る。

壁際でそわそわしていた美波が駆け寄り、
共にスマホを見る。

画面には見覚えの無い番号。

通話をスピーカー出力にし、

恐る恐る通話に出る一郎。

美波も固唾を呑む。

一郎「・・・はい」

鉄男の声「メモは見たか？」

ボイスチェンジャーの冷たい声に
固まる一郎と美波。

一郎「ああ」

鉄男の声「年の為に聞くが、警察には連絡してないな？」

美波に目をやり、頷く一郎。

一郎「もちろんしてない」

鉄男の声「よし。じゃあ5000万、用意するな？」

一郎「・・・そんなに無理だ」

鉄男の声「遠藤一郎さん。あんたにとっちゃ

全く無理な金じゃねえだろ？」

一郎「・・・」

鉄男の声「あんたはいつもの様に仕事で帰宅は遅い。

で、美波さんて言ったっけ？料理研究家やってる

奥さんも同様、遅くまで仕事だったんだろ？

1人寂しくお留守番の息子を攫うなんて

簡単な事だったぞ」

美波「！」

鉄男の声「防犯カメラをチェックをしても無駄だ。

こっちは顔を晒す程頭悪くないんでな」

一郎「・・・」

鉄男の声「警備会社に契約しとけば良かったな。

アラームの対処とか、もうちょつと手間取ったのに。

金持ってるくせにケチだと、いい事ないぞ？」

一郎「(ムツとして) お金を渡せば、本当に

賢を返してくれるんだな？」

鉄男の声「もちろんだ。お互い、ウインウインの

関係でいこうじゃねえか」

一郎「・・・」

鉄男の声「明日の朝、また連絡する。

そしたら金をおろしに行ってもらおう」

通話が切れる。

ナイフをポケットに戻し、
玄関前に着くとチャイムを押す。
すかさず、鍵を開錠する音が聞こえる。

寛 「・・・」

勢いよくドアが開き、

一郎が歓迎の表情で迎える。

一 郎 「寛！よく来てくれた」

一 寛 「？お、おお」

一 郎 「早く入ってくれ」

一郎に促され、中に入る寛。

一 寛 「・・・一郎」

一 郎 「ん？」

一 寛 「お金の事じゃないのか？」

一 郎 「ああ、今日は違う。けど、協力する義理が

お前にはある」

寛 「あ？」

× × ×

一 郎 「（美波に）美波は初めてだな。寛だ。」

美波に頭を下げる寛。

寛 「どうも。寛です」

お辞儀を返す美波。

美 波 「・・・警察にいらっしゃったんですか？」

一 郎 「ヤクザ相手の部署にいたんだよな？」

寛 「ああ。おかげでこの様だ」

引き摺る右足を見せる寛。

美 波 「怪我、ですか？」

寛 「チンピラに撃たれて、警察（カイシャ）から

お役御免になっちまって」

一 郎 「今は興信所やってんだ」

美 波 「興信所？」

寛 「探偵ってやつですよ。つつても1人でやってるし、

仕事といえは浮気調査とかそんなのばかりです」

頭を下げる美波。

美波「すみません、私達家族の事に巻き込んだじゃって」

一 郎「こいつはいいんだよ」

美波「え？」

一 覧「・・・」

一 郎「とにかく、これを見てくれ」

一 覧の眼前に一郎がメモを差し出す。

一 覧「(見て)！」

一 覧「メモを手にとると、高揚を押さえるのに必死な覧。」

一 覧「・・・警察へは？」

一 郎「もちろんしてない」

一 覧「俺が言うのもなんだが、それが賢明だな」

一 郎「お前が犯人を捕まえてくれ。」

一 覧「こんな薄汚い奴には一銭も渡したくないんだ」

美波「・・・」

一 覧「で、ホシに思い当たるところは？」

一 郎「ホシ？ああ、犯人か。いや、全く思い当たらない。」

一 覧「まあ、社長業なんてやってるから」

一 覧「どこで恨み買ってるか分からんから」

一 郎「スマホを出し、着信履歴を覧に見せる一郎。」

一 覧「さつき掛かってきた。この番号から追えないか？」

一 覧「(ジツと見て) どうせトバシの携帯だ」

一 郎「トバシ？」

一 覧「闇ルートで買えるヤツだ。こっちからは追えない。」

一 覧「とにかく、お金は用意しとかないとな」

一 郎「明日の朝、犯人からまた連絡がくる。」

一 覧「そしたら金をおろしに行けって言われた」

一 覧「なら、今はこちらに出来る事はないな」

一 覧「改めてメモの『5000マンエン』に」

一 覧「目を落とす覧。」

並んで座る勇次と賢。

賢 「お兄ちゃん」

勇 次 「え？」

賢 「何かスポーツやってる？」

勇 次 「え？特にやってないけど」

沈黙。

賢 「あのさ」

勇 次 「は？」

賢 「僕が今、お兄ちゃんに質問したじゃん。

普通、今度はそっちが『そっちは？』って聞かない？

勇 次 そういうコミュニケーションで大事でしょ」

賢 次 「え？ああ、ごめん。そっちは？」

賢 次 「僕、サッカー好きなんだ。けどー」

勇 次 「けど？」

賢 「この前、練習で転んで腕を怪我しちゃって。

それからはお母さんが大反対なんだ。今日も僕がまた

サッカーやりたいって言ったら喧嘩になって」

勇 次 「よっぽどサッカー好きなんだね」

賢 「うん。僕ね、今は下手だけど将来は

サッカー選手になりたいんだ」

勇 次 「へえ。いいじゃん」

賢 「お兄ちゃんは？なりたいモノってないの？」

勇 次 「俺？」

賢 「うん」

傍らのトートバッグに目をやる勇次。

勇 次 「・・・特にないかな」

賢 「えくそうなの？何も？」

勇 次 言葉に詰まり、強引に話題を変える勇次。

賢 「と、ところでき。怖くないの？」

勇 次 「え？」

賢 次 「だって誘拐されてんだよ？」

賢 「さっきまで凄く怖かったけど今は大丈夫。

お兄ちゃんがいてくれるから」

勇 次 「俺なんか頼りになんないよ」

賢 「なるよ。いつも一人ぼっちだから
今、凄く嬉しいんだ」
勇次「・・・」

33 同 中

勇次と賢の話し声が聞こえる。

鉄 男「うるせえええっ！」

ピタッと静まり返る。

鉄 男「てめえらの状況わかってんのか、バカ野郎。」

怖がれてんだよ」

缶ビールを飲み干す鉄男の目の前、酔いつぶれ

突っ伏して眠っていた直也が突然顔を上げる。

鉄 男「うおっ！」

直 也「怖くねえぞ！貧乏なんかよおっ！！」

直也の額に空き缶がヒットする。

直 也「んがっ！」

突っ伏す直也。

鉄 男「(ため息) さあ。明日、勝負だ。寝るとするか」

コハダの握りを頬張る鉄男。

34 遠藤家 2F 賢の部屋

ドアを開け、室内に足を踏み入れる美波。

壁には有名サッカー選手のポスターが貼られ、

机の上や床はサッカー雑誌や

グッズで溢れている。

階下から美波を呼ぶ一郎の声。

それに構わずベッドに置かれた

サッカーボールを手にすると

力強く抱き締める。

美 波「賢・・・」

一郎がやってくる。

一 郎「おい、呼んでるのに。何してる？」

美 波「・・・あの子、今日またサッカー

やりたいたって言ったの。

だけど、私が反対しちゃって大喧嘩」

改めて部屋を見回す美波。

美 波「この部屋に入ったのも久しぶり。

あの子の事、何も理解してなかった」

嗚咽を堪えきれない美波。

一 郎「なあ。寛に食事用意してやってくれないか？

これから世話になるんだ」

階下へ戻っていく一郎。

美 波「・・・」

35 同 近く 人気のない道 *島川と適宜カットバック

寛が出てくると煙草に

火を点け、スマホを取り出す。

島川の番号を押し、耳に当てる。

島 川「ヨシ」

「悪いな。ちよつと戻れなくなった」

島 川「揉めてんのか？大丈夫かよ？」

高揚した笑みを浮かべる寛。

寛 「大丈夫。むしろ僥倖ってヤツだ」

島 川「僥倖？俺、バカだから難しい言葉分かんねえよ」

寛 「ガキが誘拐された」

島 川「誘拐！？ダチの？」

寛 「ああ。お陰で自分がリスクを負わずに済みそうだ」

島 川「リスク？」

「なんでもない。で、明日の朝、

身代金を用意するんだが」

煙を大きく吸い、意を決す様に吐き出す寛。

寛 「それをごっそり頂く」

島 川「マジ？幾ら？」

寛 「5000万」

島 川「ワオ！？」

寛 「手伝ってくれるよな？」

島 川 「もちろん。ヨシの為なら何でもやるって」

笑う寛。

寛 「俺のマンションにトバシのガラケーがある。

念の為、明日以降はそれを使え。

それと明日の朝、この後送る住所へ行つて

拳銃を手に入れてくれ。

一番安い奴でいい」

島 川 「俺、金ねえぞ」

寛 「後日払うと言つとけ。店主は現役時代

世話したジジイだから俺の名前を出せば問題ない」

3 6 廃工場 外観（日替わり..朝）

3 7 同 事務所

寄り添い眠っている勇次と賢。

鉄男の絞り出す様な声が響く。

鉄男の声「おい・・・」

勇次が目を開ける。

勇 次 「？」

鉄男の声「おくい。起きろ・・・」

賢もウトウト目を覚ます。

鉄男の声「起きろおおっ！」

怒声に身体を硬直させる勇次。

勇 次 「は、はい！」

鉄男の声「植田！こっち来い！！」

勇 次 「は？」

鉄男の声「こっちに来いってんだ！！！」

勇 次 「行きます！・・・と言つてもな」

立ち上がると、賢を残しピョンピョン

跳ねながら事務所を出て行く。

3 8 同 工場内

勇 次「え？」
ピョンピョン飛び跳ねながら、やってくる勇次。

勇 次「だ、大丈夫ですか！？」
テーブルに鉄男が突っ伏している。

勇 次「だ、大丈夫ですか！？」
ピョンピョン駆け寄る勇次。

鉄男が顔を上げる。

鉄 男「は、早く来いよ、バカ野郎・・・」

勇 次「すみません。どうしたんですか？」

鉄 男「腹が痛え・・・」

勇 次「え？」

鉄男が指差す先、ガリだけ残された
パックがある。

勇 次「寿司？」

鉄 男「これしか考えられねえ・・・」

勇 次「わっ！？」
勇次の背後、トイレのドアが勢いよく開く。

勇 次「わっ！？」
直也が中から這い出てくる。

直 也「だ、大丈夫ですか？」

直 也「大丈夫な訳ねえだろ・・・痛ててて」

勇 次「びよ、病院行きましょう！」
力尽き突っ伏してしまふ直也。

鉄 男「保険証なんか持ってねえ」

勇 次「え？」

鉄 男「病院なんかに掛かる程、ヤワに生きてねえんだ」

勇 次「・・・」
ヤワな佇まいの鉄男と直也。

鉄 男「・・・」

鉄 男「それに、これから大事な取引があるんだからよ」

勇 次「無理ですって、その状態じゃ」

鉄 男「ああ。俺らは無理だ」

勇 次「??？」

鉄 男「お前がやんだよ」

勇 次「ええっ!？」

鉄 男「指示は電話で出す。お前は言われた通り動けばいい」

勇 次「でも……」

鉄 男「お前も金が欲しいんだろ？」

勇 次「え！？」

脂汗を浮かべつつ、ニヤリと笑う鉄男。

鉄 男「お前、ゆうべ俺らに弾かれた時、慰謝料が

どうの呻いてたよな？」

勇 次「……」

鉄 男「当たり前屋カマしたんだろ？」

勇 次「や、やろうとはしてましたけども

ホントに撥ねられるとは……」

鉄 男「無事に手に入れたら、お前にも分け前をやる」

勇 次「え？」

鉄 男「金欲しいだろ？」

勇 次「……まあ」

鉄 男「(笑って) お前が協力すりゃ俺らもお前にも

金が手に入る。で、チビも無事、家に帰れる。

こんな全員がウインウインな話はねえだろ？」

直也が顔を上げる。

直 也「そ、それ古いって言ったろ？……」

鉄 男「うるせえっ」

直 也「てかよ、ホントにそんな野郎に任せんのかよ？」

鉄 男「お前に噛みついたぐらいだ。少しは骨がある。う！？」

立ち上がり、弱弱しい足取りで

トイレに向かう鉄男。

勇 次「……」

39 同 *時間経過

拘束を解かれた勇次が、パイプ椅子に腰掛けている。

テーブルを挟んだ鉄男は険しい表情。

鉄 男「ここに行け。赤い屋根の洒落た家だ。」

前方に見渡せる場所に車は停める」

住所が殴り書きされたメモと

鉄 男「お前のスマホは預かつとく。
着いたらためえの番号に連絡しろ」
勇 次「わ、わかりました」
鉄 男「あと、パソコン持ってたよな？」
勇 次「え？」

× × ×

トートバッグを持って戻ってくる勇次に
小ぶりなステイック状のモノを渡す鉄男。

勇 次「何ですか？」
鉄 男「使う時がくれば言う。さっさと行け」
勇 次「は、はい」

緊張した面持ちで事務所の方に目をやると
立ち上がる勇次。

口廻りをぺろりと舐める。

鉄 男「緊張してんのか？」
勇 次「そりゃ、しますよ・・・」

弱弱しく笑う鉄男。

鉄 男「気分落ち着かせる。俺は今、吸う気に
なんねえからよ」

セブンスターとライターを差し出す鉄男。

勇 次「・・・あの、ガムとかありますか？」
鉄 男「ねえ。けど、グミなら食いかけがあるぞ」
「思わず吹き出しそうになる勇次。」

鉄 男「んだよ!？」
勇 次「いえ!！」

ポケットからグミの袋を取り出す鉄男。
勇次はそれを受け取り、ワゴンに向かう。

鉄 男「あ! 待て!!」
勇 次「はい？」
鉄 男「帰りに下痢薬とトイレットペーパー買ってこい」

4 0 遠藤家 傍の公園

ナビ音声『間もなく、目的地周辺です』

ハイエースがやって来る。

勇 次「えくと、あれだ」

視線の先、赤い屋根の瀟洒な一軒家が見える。
それを前方に見通せる公園脇の通りに
ハイエースが停車する。

4 1 ハイエース 車内

グミを一粒、口に放るとガラケーを取り出し
自分のスマホの番号をプッシュする勇次。

鉄男の声「着いたか？」

弱い鉄男の声。

勇 次「はい」

鉄男の声「ダッシュボードを開けろ。写真が入ってる」

勇 次「写真？」

ダッシュボードを開け、

一枚の小さなポラロイドを取り出す。

勇 次「(見て) え!？」

手足を縛られた賢の姿が写されている。

鉄男の声「それ持ってあの家に行け」

勇 次「・・・で、どうするんですか？」

鉄男の声「玄関前にそれ置いてピンポンダッシュだ」

勇 次「ピンポンダッシュ？」

鉄男の声「ちっ。ピンポンしたら

ダッシュで車に戻れってんだよ」

勇 次「な、なんでそんな事を？」

鉄男の声「いいからやれ!戻ったら家をジッと見てろ」

勇 次「わ、わかりました」

4 2 遠藤家 玄関前

オロオロ辺りを見回しながら
緊張した足取りでやってくる勇次。

勇次「(息を呑み)」

意を決すると、ドア下にポラロイドを
そっと置く。

4 3 遠藤家 リビング→玄関

テーブルに座る一郎。

離れた所で、美波は壁を背に立っている。

寛はカーテンを掛けた

表通りに面する窓際に立っている。

テーブルの上に置いた一郎のスマホが鳴る。

美波「!!」

スマホを手にし、画面を見るが無視する一郎。

美波「出ないの？犯人からでしょ？」

一郎「違う。会社の間だ。放っておいていい」

一郎が鳴り続けるスマホを切り、テーブルに
戻すと玄関チャイムが鳴る。

一郎 美波「!？」

インターフォンモニターに飛びつく美波。

美波「(見て) 誰もいないわ」

玄関に向かう美波。

一郎「寛。お前も来てくれよ」

寛 「いや、俺はここにいる」

不満そうに美波の後を追う一郎。

寛 「・・・」

4 4 同傍の公園 ハイエースの中

運転席に飛び込んでくる勇次。

勇次「(荒い息) ぜえ、ぜえ」

呼吸を鎮めつつ、前方の遠藤家を注視する。
すると美波と一郎が家から出てくる。

ポラロイドを拾う美波。

勇次「(息を呑む)」

美波がやがて激しく取り乱す。

勇次「！」

嗚咽する美波から目が離せない勇次。

勇次「……」

一郎が美波を抱え、中へ戻っていく。

勇次「(ため息)」

ガラケーを取り出し、鉄男を呼び出す勇次。

しばらく呼び出し音が続き、やっとの事で

鉄男の声が返ってくる。

鉄男「(出て) トイレ入ってた。写真置いたか？」

勇次「はい。あの、家から出てきました」

鉄男「誰が？」

勇次「多分、お父さんと……お母さんです」

鉄男「他はいなかったか？」

勇次「はい」

鉄男「よし」

逡巡する勇次。

勇次「あの、やっぱ俺ー」

鉄男「(遮り) 今から言う事をメモしろ」

勇次「え？」

鉄男「メモしろって言ってんだ！」

気圧される勇次。

勇次「は、はい。ちよつと書くモノを……」

鉄男「早くしろ！またトイレ行きたくなってきた！！」

勇次「は、はい！」

45 同 玄関中

取り乱す美波をソファに座らせる一郎。

一郎「こんなモノが」

一郎からポラロイドを受け取る寛。

寛「(見て) やはりな」

一郎 美波「？」

寛 「ホシはこの家に警察や部外者がいないか
確認する為にこんなモノを置いたんだ」

一郎 「という事は、こちらを見張ってる？」

寛 「ああ。近くにいるな。
やはり、俺は出なくて良かった」

一郎のスマホが鳴る。

一郎 「！」

美波 「・・・あなた」

通話をオープンにし、応じる一郎。

一郎 「もしもし？」

息遣いだけが聞こえる。

一郎 「？もしもし？もしもし？」

勇次の声 「け、警察には連絡してないようだな？」

一郎 「・・・もちろんだ」

唾を呑む音。

寛 「・・・」

勇次の声 「よし。えくと、この後も誰も家に近づけるなよ」

一郎 「わかつてる」

勇次 「じゃ、じゃあ金をおろしに行こうか？」

メモを見ながら話す勇次。

一郎 「ああ」

唇をギュツと結む一郎。

勇次 「5000万だぞ」

メモの『5000万』に息を呑む勇次。

一郎 「わかつてる」

勇次 「レ、レンガにしろよ」

一郎 「レンガ？何だそれは？」

勇次 「え？」

通話口を押さえ、メモを凝視する勇次。

勇次 「(小声) 急かされて聞いたから
教えて貰ってなかった・・・」

一郎 「もしもし？もしもし？」

寛 「・・・」

寛が傍にあったメモ帳に手早く何かを書いて一郎に見せる。

『現金を1千万ずつビニールでパック』とある。寛に頷き返す一郎。

勇 次「(ヤケクソで)と、とにかくレンガだ。レンガだぞ」
目をギョツと閉じる勇次。

一 郎「わかった」

勇次の目がキョトンと開く。

勇 次「え？あ、ああ、よかった」

一 郎「は？」

勇 次「いや。あと、金おろしに行くときは車は使わない」
メモを放る勇次。

寛 「・・・」

寛がまたメモ帳に手早く何かを書いて一郎に見せる。

一 郎「・・・5000万だぞ？重さにすれば5キロ。5キロとはいえ、それを持って長距離歩かせる気か？」

勇 次「え！？5キロ？あ、その、えくと・・・こ、子供の為だ。我慢しろ」

一郎が寛に目をやる。寛は頷き返す。

一 郎「・・・わかった」

勇 次「また連絡する！」

急いで通話を切る勇次。

勇 次「ふう・・・」

深く息を吐くとグミを一粒、口に放る。

***カッターパック終わり**

スマホをテーブルに置く一郎。

不思議そうに思案する寛。

寛 「ホシは素人だな。言ってる内容はそれっぽい言葉や語気から悪党特有の覇気を感じない。

誰かに言わされてるみたいだ」

一 郎「ゆうべと違うんだよ」

寛 「？」

同意を求める様に美波に目をやる一郎。

美波「ゆうべ電話してきた声と違うんです」

一郎「ゆうべの奴の方が落ち着いてた」

美波「声色も、もっと怖かったし」

一瞬思索するが、一郎に目をやる寛。

寛「まあ、今はそこを考えてもしょうがない。

とにかく銀行に行ってくれ」

一郎「あ、ああ」

寛「1つ言っとく。この家の近くにいる

という事は、ホシはお前を尾行するぞ」

一郎「え！？」

美波「！」

寛「心配ない。尾行するのはこちらが

外部と接触しないか監視する為だ。

それを確認した上でもっと安全にお金を

手に入れる事が出来る取引を持ちかけてくる筈」

一郎「取引？金の受け渡して事か？」

寛「ああ」

一郎「じゃ、じゃあ尾いてきたトコを捕まえよう！」

寛「（首を振り）ホシがそいつだけとは限らない。

仲間がいたら子供の命が」

美波「！！」

寛「もし尾行に気付いても何もするな」

一郎「でも、尾行してきた奴が金を奪おうと

してくるんじゃないのか？」

テーブルに置かれたポラロイドを改めて見る寛。

寛「それはない。こんな手の込んだ事するんだ。

ホシは用心深いと推察できる。そんな奴が

人目につく街中で襲う様なリスクは犯さない」

一郎「美波「・・・」

寛「ホシを捕まえるのは取引の時、

敢えてお金を渡した後だ」

一郎「おい！渡す前に捕まえろよ！」

寛「待てよ。子供を無事に取り戻すと同時に

俺がホシを追跡してアジトを突き止める。
そしたら警察に連絡して一気に踏み込むんだ。
短期決戦で金も取り戻せる」

一 郎「・・・」

一 郎「とにかくまずは、お金を持ち帰るんだ」

一 郎「(不服そうに) わかった」

4 6 同 傍の公園

フロントガラス越し、玄関から上着を

羽織った一郎が現れる。

シートに身を深く沈めていた勇次が

ゆっくり身体を起こす。

ガラケーを手にし、鉄男に掛ける。

勇 次「で、出てきました」

鉄男の声「よし。余計な事しないか後を尾ける。

サツや外部と接触する様ならすぐ連絡しろ」

勇 次「・・・接触したらどうすんですか？」

鉄男の声「あ！？んなモン、そんな時考える。

てめえは余計な事考えず、言われた事だけやれ！」

勇 次「・・・わかりました」

鉄男の声「いいか？絶対気づかれるな。気配を消せよ。

何かあったらすぐ連絡しろ。う！？」

通話が切れる。

慌てて運転席を降りる勇次。

4 7 同 リビング

カーテンの隙間から、真つすぐ伸びる
家前の道を伺う寛。

遠くに一郎の緊張した後ろ姿が見える。

すると左手から男(勇次)が現れ、

左に折れると一郎の後に続く。

寛 「・・・」

緊張した面持ちで歩く一郎。

少し距離を置き、更に緊張した勇次が続く。

勇次「気配を消す・・・気配を消す・・・」

息を潜め、ジッと一郎の背中を追う勇次。

背後で車のクラクションが響く。

勇次「(ドキッ) わっ!？」

一郎が立ち止まる。

慌てて踵を返し、電柱の陰に隠れる勇次。

そっと窺うと一郎はこちらを向く事無く

再び歩き出す。

勇次「(ホッとして)」

再び一郎の背中を凝視しながら後を追う。

と、一郎とすれ違ったチンピラ風情の男が

そのまま勇次の方へやってくる。

勇次「？」

チンピラ「てめえ、何睨んでくれてんだ？」

勇次に鋭い眼光を投げるチンピラ。

勇次「え!？」

チンピラ「俺に勝負挑んでんのか? やってやんよ」

勇次「い、いや! 誤解ですよ!!」

チンピラに胸倉を掴まれる勇次。

一郎の背中が遠ざかっていく。

チンピラ「こっち来い、こら」

人気の無い路地に連れ込まれる勇次。

勇次「いやいやいや! 違いますって!!」

ガラケーを取り出す勇次。

勇次「ちよ、ちよっと待って下さい!」

チンピラ「ああ!？」

鉄男にリダイヤルする勇次。

鉄男の声「どうした?」

勇次「あの、何かあったら連絡しろって言いましたよね?」

鉄男の声「だからどうした？」

勇次「・・・怖い人に絡まれちゃいまして」

鉄男の声「あ？何やってんだてめえっ！」

勇次「か、代わります！」

チンピラにガラケーを渡す勇次。

チンピラ「？誰だお前？」

鉄男の声「・・・貴様こそ誰だ？」

チンピラ「ああ！？こつちが聞いてんだ！

お前は何モンだこの野郎！？」

鉄男の声「（鼻で笑い）俺は若の護衛を任されてる

梶健組のモンだ」

チンピラ「若？」

鉄男の声「梶健組。知らねえか？よく実話○ツクルズとか

載って有名な筈だけどな。その2代目、

梶谷会長のご子息だよ、貴様が一緒にいるのは」

少し狼狽えるチンピラ。

チンピラ「！て、適当言ってんじやねえぞ、この野郎」

鉄男の声「（呆れて）適当かどうか、試してみろよ」

チンピラ「え？」

鉄男の声「俺は今、どうしても外せねえ

オヤジ（組長）の用件があつて若につけてねえが、

ウチの若い衆が遠目から若を護衛してるぞ」

挙動不審気味に辺りを見回すチンピラ

鉄男の声「若は真面目な学生でな。跡目継いで

欲しいんだがこつちの世界に踏み込むのを

躊躇ってんだ。だから俺らが近くに纏わりつくの

嫌っててよ。それでも俺らは若を守らなきゃ

いけねえ。オヤジの命令だからな。

そんでもって遠目で見守ってたんだ」

顔を強張らせたチンピラが勇次に目をやる。

チンピラ「あんた、マジか？」

勇次「・・・なあ！もう面倒くさいからやっちゃってよ！！」

叫ぶ勇次。

チンピラ「！」

鉄男の声「若の号令が出たからにや、やるしかねえなあ」
チンピラ「!!」

ガラケーを放り、逃げていくチンピラ。

勇次「(ホッとして)」

ガラケーを拾い上げる勇次。

勇次「ありがとうございます。逃げてきました」

鉄男の声「馬鹿野郎！」

勇次「(ビクッ!!)」

鉄男の声「余計な面倒掛けやがって！

さつさと父親追いかけるっ！！

誰かと接触してたらどうすんだっ！！！」

勇次「はい！」

× × ×

必死に走る勇次。

勇次「ああ、ヤバいなあ。見失っちゃったよ」

だがすぐに足を止め、慌てて物陰に身を隠す。

勇次の視線の先、一郎が

若く美しい女Ⅱ岩田若菜と対峙している。

勇次「あれ？」

若菜に注目する勇次。

若菜は厳しい目で一郎を問い詰め、

手にしたバッグを一郎に押し付けている。

勇次「？」

背後に気配を感じると同時に

『パシャパシャ』とシャッターを切る音。

振り返る勇次。

勇次「？」

勇次の背後、望遠レンズが装着された

カメラを構えたソバージュの中年男がいる。

中年男「へへへ(笑)。お宅はどここの出版社？」

勇次「え？」

中年男「あゝごめんなさい。声掛けたのはこっちなのに

礼儀なっていないよねえ」

ポケットからシワがれた名刺を出し、

勇次に差し出す中年男。

勇次「(見て) 黒田さん？」

名刺には『カメラマン 黒田 甚平』とある。

黒田「お宅と同じ、ゴシップ誌のカメラマンです」

恥ずかしそうに頭を掻くと、カメラを

一郎たちに向けシャッターを切る黒田。

勇次「いや、俺はー」

黒田「まあ、ホントはそこにジャーナリストって

書きたいんだけどねえ」

勇次に渡した自分の名刺を指差す黒田。

黒田「でつかい事件(ヤマ)スクープして、世の中を斬る！

的な事やりたいのよ」

勇次「はあ」

黒田「昨日出た、アイドル根本里穂ちゃんと

Y o u T u b e r の熱愛スクープ

押さえたのも俺なのよ(笑)」

勇次の身体を舐めまわす様に見る黒田。

黒田「カメラどこ？胸ポケットにでも

ピンホールカメラ仕込んでんの？」

勇次「いや、俺は・・・」

黒田「(遮り) お宅も若菜ちゃん追ってんでしょ？」

勇次「え？」

黒田「いいよなあ、彼女。売れっ子だったのに

プライベートは恋に奔放、猪突猛進で。

ていうか、いつまで泣いてんだか」

再び一郎たちにシャッターを切る黒田。

勇次「はあ・・・」

黒田「でも、あの子なかなか神出鬼没でさ。

俺らみたいなのを警戒してマンション張ってても

気づかない内に変装したり裏口から出てったりだから。

じゃあ、相手を張っちゃおう、そうすりゃ

彼女が現れるって社長の家の傍に来たら

社長が出てきてさ。後を尾けようと思ったら既にあんたがいて。だから俺も後尾けてたの」

早口で捲し立て、楽しそうに笑う黒田。

勇 次「はあ。あの、彼女と社長は

どういった関係なんですかね？」

黒 田「は？」

怪訝な目で勇次を見る黒田。

勇 次「いや、まだ自分初心者で会社に言われるまま

彼女を追ってるんで」

黒 田「そんな事も知らないで追ってるの？

今をときめく若手女優とビジネス界を賑わせてる

イケメン社長の秘密の愛じゃないの。1年位前？

雑誌の企画で対談してから急接近したんだよ」

勇 次「・・・2人が愛し合ってる証拠はあるんですか？」

黒 田「だから、それを掴もうとやってんでしょ。

けど、ぶっちゃけると真実なんか要らない。

それっぽい写真が撮ればいいんだよ。

世間はそれで傾くからさ」

黒田が再びカメラを向けると

一郎が若菜を振り解き、足早に駆けていく。

勇 次「あ」

シャツターを切った黒田が、

後を追おうとする勇次の肩を掴む。

黒 田「でもさあ、熱愛ぶり撮るつもりが

意外な事になったね」

勇 次「え？」

黒 田「今の、どうみても別れ話だったでしょ？」

若菜がその場にしゃがみ込み、

両手で顔を伏せている。

勇 次「・・・まあ」

黒 田「この前、実話系雑誌の記者に聞いたんだけどさ。

実は社長の会社、表向きは羽振りがよさそうだけど

実際の金回りは火の車って言ってたんだよ。

それも関係あんのかなあ」

またまたシャツターを切る黒田。

勇次「・・・」

黒田「まあ、いいや。これはこれで盛り上がるもんね！」

勇次「・・・良かったですね。じゃ、俺ー」

黒田「ちよつと待ちなよ！なんか馬鹿にしてない？」

勇次「いえ、そんな事はー」

黒田「まあ、俺だつてこんなくだらねえ

ゴシップ追いたくなんかねえよ。あんたもそうだろ？」

勇次「はあ」

黒田「けど、今はしようがねえ。自分の修行が足んなくて

こんな事やんなきゃ食つてけねえんだからさ」

勇次「・・・」

イラつと勇次を見る黒田。

黒田「あのさ、そつちも名刺貰える？それが礼儀じゃない？」

勇次「いや、すみません。ちよつと切らしちゃつてて」

黒田「はあ？じゃあ名前は？」

勇次「え？植田です」

若菜が立ち上がり、向こうに歩いていく。

黒田「おつと。やつと本命の獲物を捕らえたんだ。

逃がしやしねえ。行こうぜ」

勇次「・・・いや、俺は一度会社に戻ります」

黒田「そうか。あんた、話したらいい奴っぽいからさ。

情報共有してえな。何か美味いネタあったら

連絡くれよ植田君！」

勇次を残しその場を去る黒田。

勇次「あ」

勇次は慌てて一郎を追う。

49 道く銀行前

息を切らし走る勇次。

勇次「いた！」

視線の先に一郎の背中を捉える。

× × ×

一郎は銀行内に入っていく。
道路を挟んだ場所で見届けると
ガラケーを出す勇次。
勇次「あの、銀行に着きました」

50 廃工場 中 *勇次とカットバツク

鉄男「おかしな事はなかったか？」
一瞬考える勇次。

勇次「え？・・・えくと、はい」

鉄男「よし。そのままジッと見張ってる」
トイレから直也の声が響く。

直也の声「鉄ニイ！もうトイレレットペーパー無くなるぞ」

鉄男「名前呼ぶな！」

直也の声「あ！ごめん」

鉄男「また何かあったら連絡しろ。ただしー」

勇次「？」

鉄男の声「もうアホに絡まれんじゃねえぞ」

勇次「・・・わかりました」

ガラケーをしまう勇次。

ふと、ショウウインドウに移る

自分の姿に目をやる。

勇次「・・・」

溜息をつき、グミを口に放る。

× × ×

銀行をジッと見張ってる勇次。
手提げ袋を重そうに持った一郎が出てくる。

勇次「！」
後を追う勇次。

手提げ袋を両手で提げ、汗をかいた
一郎が戻ってくる。

一郎「戻ったぞ」

落ち着きなく動き回っていた美波が顔を向ける。

美波「お帰りなさい」

寛がソファから立ち上がり、

表に面したカーテンの隙間を窺う。

正面の道には誰も見えない。

寛「・・・」

× × ×

2Fへ駆けあがる寛。

表に面した賢の部屋に入り、大きな窓外を見る。

正面の道と垂直に交わる道の左方、

先程見た男（勇次）が公園脇に

停めたハイエースに乗り込むのが見える。

寛「（呟く）あいつか」

寛のスマホが鳴る。

画面には登録されていない番号。

島川の声「ヨシ。このガラケーでいいか？」

寛「ああ。銃は？」

島川の声「さっき、やっと手に入れた。」

ジジイがヨシの名前出しても渋ったんだよ」

寛「で？」

島川の声「『クビになった障害持ちの刑事の名前出されても

痛くも痒くもねえ。金が先だ』とか言うから頭来て

ジジイ殴りまくってさ。

シワクチャのアソコひん剥いて熱湯かけてやったら

素直に応じてくれたよ（笑）」

寛「（笑って）じゃあ、今から言う所に来てくれ」

鉄男に電話する勇次。

すぐに鉄男の苦しそうな声が返ってくる。

鉄男の声「戻ったか？」

勇次「はい」

鉄男の声「異常は？」

勇次「ありませんでした」

*以下カットバック

鉄男「じゃあ家に異常がなかったか調べろ」

勇次「え？どうやってー」

鉄男（遮り）「ドラレコあんだろ。SDカードを抜け」

勇次「ドラレコ？えくと」

吸盤でフロントガラスに取り付けられた

ドラレコを探ると側面にスロットがある。

そこからマイクロSDカードを抜く勇次。

勇次「えくと、抜きました」

鉄男「それをカードリーダーに挿せ」

勇次「カードリーダー？」

鉄男「渡したろ？」

勇次「（思い出し）あ」

助手席に置いたトートバッグから

スティック状のカードリーダーを出す勇次。

鉄男「SDを入れたリーダーをお前のノートPCに繋げ」

マイクロSDカードを入れたリーダーを

ノートPCの端子に接続すると

画面にフォルダが現れる。

それを開くと1分毎に記録された

録画サムネイルが100以上表示される。

鉄男「それ全部チェックしろ」

勇次「全部！？沢山ありますけど・・・」

鉄男「誰がじっくり見ろって言った？

AVの本番じゃねえんだ。

その手前の下手な芝居部分見るみてえに早送りやれ。

勇次 「おかしなトコあったら止めて見ろよ」
「わ、わかりました」

53 遠藤家 リビング

一 郎 「どうした？」 寛がリビングに戻ってくる。

一 郎 「ちよつとな。金は？」

一 郎 「これだ」

上着を脱ぎ、汗を拭う一郎が
テーブルに置いた手提げ袋に目をやる。
寛が中身を確認する。

一 郎 「・・・」

寛が怪訝な表情を一郎に向ける。

一 郎 「額が少くないか？」

一 郎 「ん？まあ・・・」 美波が一郎に詰め寄る。

美 波 「どういう事？」

バツが悪そうに美波たちから離れ
ソファに座り込む一郎。

一 郎 「誘拐犯なんか一銭も渡したくないんだよ！
これでも用意した方だ！」

開き直る一郎に啞然とする美波。

美 波 「本気で言ってるの？」

寛が一郎の元へ。

一 郎 「一郎、お金は一度渡した上で捕まえるって言ったろ？」

一 郎 「向こうが中身見る前に捕まえればいいじゃないか」

寛 「それは危険だ。ホシが金を手に入れた途端、
こちらの追跡を撒いて中を見たらどうするんだ？」

口詰まる一郎。

一 郎 「そうならない為にお前を呼んだんだろ！？
誘拐犯なんか騙したって俺はこれっぽちも

悪いとは思わない！」

寛 「確かに俺たちはホシを欺いて捕えようとしてる。

一 だが嘘は極力小さくしてリスクを減らさないとなー」

一 郎「(遮り) 嫌だ！絶対に金は渡さないぞ」
溜息をつく寛。

美 波「幾らおろしてきたの？」

一 郎「は？・・・2000万」

美波がリビングを出て行く。

寛 「？」

×

×

×

2階から降り、上着を羽織った

美波がリビングに戻らず廊下を進む。

リビングから顔を出す寛。

寛 「どこへ？」

玄関で靴を履く美波。

美 波「私がお金を降ろしてきます」

一 郎が飛び出してくる。

一 郎「おい！」

無視して出て行く美波。

寛 「(小さく安堵)」

5 4 同 公園の傍

勇 次「いっぱいあり過ぎるって」

グミを噛みながらPC画面をジッと見つめ、

映像をチェックする勇次。

もう一粒食べようとすが中身は空。

袋を逆さまにし、残念そうな顔。

家から美波が出て行くが気づかない。

×

×

×

最後の映像を確認し終えると

ノートPCを閉じ、目を擦り

鉄男に電話する。

勇次「特に異常はありませんでした」

鉄男の声「よし。一度戻って来い。買い物忘れるなよ」

勇次「わかりました」

通話を切り、ワゴンを出発させる勇次。

その後をどこからか現れた

ピックアップタイプの4ドア

シボレーアバラランチが続く。

55 道くデイスカウントストア 表

運転する勇次。

勇次「あつた」

右手に見えるドラッグストアの

駐車場にハイエースが入る。

その道向こうにシボレーが停車する。

ハイエースを降り、店内に入っていく

勇次の姿を追う運転席の島川。

島川「あんな野郎が誘拐犯かよ」

56 遠藤家 リビングく玄関

ソファに深く腰を沈め、無然としている一郎。

テーブルにつく寛のスマホがバイブする。

寛 「悪い。ちよつと」

スマホを手にリビングを出る寛。

× × ×

玄関で1人、スマホを開く寛。

島川コメント『犯人 見つけた 今は家を離れてる』

寛コメント 『そのままアジトまで後を尾ける』

島川コメント 『了解』

スマホをしまう寛。

57 デイスクラウンストア 店内

勇次「えくと下痢止め……」
トイレットペーパーを乗せたカートを押す勇次。

視線の先、大家の真紀子が買い物をしている。

勇次「げっ」

立ち止まった瞬間、ガラケーが鳴り

真紀子がこちらに目を向ける。

勇次「！！」

棚陰に隠れ、ガラケーを耳に当てる勇次。

勇次「(小声) はい」

鉄男の声「水買ってきてくれ。大量にな」

力ない鉄男の声。

鉄男「トイレ行き過ぎて脱水症状なんだよ、頼むぞ」

通話が切れ、その場をいそいそと離れる勇次。

× × ×

周囲を窺いながらレジで会計する勇次。

レジ脇に置かれたガラスケースに

煙草が並んでいる。

勇次「……あの」

店員「はい？」

勇次の視線が煙草のケースから

レジ前に置かれたグミに移る。

勇次「えくと、これもください」

グミをカゴに入れる。

店員「全部で2452円になります」

財布から札を出す勇次。

勇次「(ため息)」

58 同前

大量の買い物袋を提げ、出てくる勇次。

女の声「やっと思つけた」

勇次「(ドキッ)！」

恐る恐る振り返ると真紀子が立っている。

勇次「お、大家さん」

真紀子が勇次に詰め寄る。

真紀子「ちよつと植田さん！まだ家賃入ってないわよ！」

勇次「・・・す、すみません」

×

×

×

島川「何してんだ、あいつ？」
シボレーの島川が店前の騒ぎに目をやる。

×

×

×

銀行の手提げ袋を提げ、急ぎ足の
美波が店前の歩道を通り掛かる。

美波「？」

足を止めると多くの客が見ている中、

初老の女性が平謝りの青年を

罵倒しまくっている。

美波「・・・」

躊躇するが、急ぎ足でその場を去る美波。

×

×

×

真紀子に責め立てられ続ける勇次。

真紀子「本当に出て行ってもらおうから！」

勇次「あの、もうちよつと待って貰えませんか？」

真紀子「もうちよつとって充分すぎる程待ったわよ！

フラフラしてる暇あったらさっさと働きなさいよ！

若い人がみつともない！！」

勇次「すみません」

真紀子「謝らなくていいから早く家賃払いなさいよ！！」
女の声「あの」

勇次「?!」

2人の目の前、美波が立っている。

勇次「！」

真紀子「何？」

美波「人が大勢いるところで騒ぎ過ぎじゃないですか？」

勇次「？」

真紀子「(ムツとして) 何なのよ、あなた？」

美波「通りすがりの者です」

真紀子「通りすがりの人が何でちよっかい出してくるの？」

美波「我慢出来なくて」

真紀子「何が？関係ないでしょ。引っ込んで」

美波「さっき彼に働けて命令してましたけど

この人の何を知ってるんです？」

勇次「？」

真紀子「は？」

美波「働きたい、お金を稼ぎたいと思ってても、

本人の意志だけじゃどうにもならない事もあるんです」

真紀子「そんな事、私には関係ないわよ。」

さあ、関係ない人はどっかに行って」

美波「(食い気味に) 幾らですか？」

真紀子「は？」

勇次「？」

美波「家賃。幾らですか？」

真紀子「・・・2か月分で8万8千円だけど」

勇次「??」

手提げ袋から9枚の1万円札を出し

真紀子に突き出す美波。

真紀子「？」

勇次「??」

美波「これで文句ないですよ？釣りは結構ですから」

真紀子「(啞然)」

戸惑いながらも札を受け取る真紀子。

訳が分からずにいる勇次。

美波「(勇次に)ごめんなさい、余計な事して」

美波は足早に去って行く。

勇次「あ」

我に返り、後を追おうとするが

美波の姿は人込みに消えてしまう。

勇次「・・・」

59 遠藤家 リビングとトイレ

美波が帰ってくる。

ソファに腰掛けた一郎に目もくれず

寛の元へ。

美波「残りのお金です。私が出せる全てです」

一郎が持ってきた手提げ袋の隣に

自分が持ってきた袋を置く美波。

それを見て(満足げに)頷く寛。

寛「じゃあ、犯人からの連絡を待ちましょう」

一郎は不機嫌を隠さないでいる。

寛のスマホがバイブする。

画面を見ると島川からコメントがきている。

島川コメント『アジトに戻った』

一郎達に目をやる寛。

寛「ちよつとトイレに」

×

×

×

リビングを出て廊下にあるトイレに入る
と島川に電話する寛。

島川の声「もしもし」

寛「(小声)俺だ」

島川の声「これからどうする？」

寛「ホシは一人じゃない筈だ。何人いるか確認しろ。

取引の際、俺が尾行した流れで襲ってもいいが

対策は取つとかないとな」

島川の声「ていうか、俺らでダチを襲って身代金

頂いちまえばいいじゃねえか」

寛 「日本の警察を舐めんじゃねえよ。

強盗なんてのはリスクが高すぎる。

それに俺はこの足だ。わかるだろ？

下手は打てねえんだよ」

島川の声「え？でも金は奪うんだろ？

だから銃も用意したんだしよ」

寛 「ホシからはな」

島川の声「は？」

寛 「ホシがあのお親から身代金を奪ったって

事実が重要なんだよ。銃さえあれば今の俺でも

そいつらをなんとか制圧できる。

ホシは悪党だ。俺らに金奪われても警察に

届けられる訳ねえだろ？」

島川の声「そうか」

寛 「手を汚さずに金を手に入れる。最高じゃねえか」

島川の声「(笑って)俺がヨシの手足になって動くぜ」

寛 「ああ。金を手に入れたら、煩わしい事にケリつけて

海外にでも飛ばうぜ」

島川の声「2人か？」

寛 「もちろんだ」

60 廃工場 傍

シボレーの車内、満足げに

通話を切った島川が運転席から降りる。

建物の前にやって来ると降りた

シャツターの脇に小さな扉がある。

手を掛けるが鍵が掛かっており、

舌打ちすると脇へ回っていく。

61 廃工場 中&建物脇

勇次「あの」

テーブルに突っ伏した鉄男の傍らに立つ勇次。
勇次「(少し強めに) あの」

勇次「あの、戻りました」
勇次の呼び掛けに顔を上げる鉄男。

鉄男「お、おお・・・」

テーブルの上に置かれた買い物袋を
見つける鉄男。

下痢薬を取り出し、錠剤を口に放ると
ペットボトルの水を一気に飲む。

トイレから直也の声がする。

直也の声「おい、戻ってんのか？」

勇次「え？はい」

直也の声「紙！持ってこい！！」

勇次「あの・・・」
トイレトペーパーを手にトイレに行く勇次。

ドアが勢いよく開き、とてつもない素早さで
トイレトペーパーが奪われる。

勇次「わっ！」

× × ×

島川「ちっ。建物脇の勝手口のドアノブを握る島川。
更に裏手へ回る島川。」

62 同 事務所

コンビニ袋を提げた勇次が入ってくる。
ソファに腰掛けた賢が安堵の笑顔を向ける。

勇次「ただいま」

賢「お兄ちゃん！」

勇次「朝ごはん食べてないだろ？買ってきた」

賢の後ろ手を解いてやる勇次。
コンビニ袋から出した
おにぎりとジュースを手渡す。

賢 「ありがとう」

賢 フィルムを剥がし、おにぎりを頬張る賢。

賢 「美味しい！」

賢 勇次もおにぎりを頬張る。

勇次 「うん美味しい！」

勇次 もぐもぐ食べる2人。

賢 「お兄ちゃん。どこ行ってたの？」

勇次 「え？まあ、ちよつと」

賢 顔が曇る勇次。

賢 「あの人達は？何か苦しんでるけど」

勇次 「ああ。訳あって具合悪いんだ」

賢 「具合悪いって、寝込んでるの？」

勇次 「うん。．．．あ」

賢 ハツとする勇次。

×

×

×

事務所のドアが静かに開く。

賢 顔を覗かせる勇次と賢。

賢 「．．．死んでるの？」

勇次 「いや。死んではないと思うけど．．．」

賢 鉄男と直也が突っ伏している。

勇次 「行こう」

賢 「うん」

賢 そつとシャッターに向かう勇次と賢。

賢 直也が急に起き上がる。

勇次 賢「！」

賢 慌てて物陰に隠れる勇次と賢。

直也 「トイレトイレ」

直也 お尻を押さえながらトイレに飛び込む直也。

直也 安堵し、再びシャッターに向かう2人。

勇次「(小声)早く。行つて」
賢「(頷く)」
その脇の小さな扉を開錠する勇次。

63 同前

裏手から戻ってくる島川。

島川「ん？」

咄嗟に身を隠すと、小さな扉から出てきた男と子供が向こうへ走り去っていく。

× × ×

島川「？」

開きっぱなしの扉の向こうを覗く島川。

工場内、デスクで突っ伏す男と

床で倒れている男がいる。

64 遠藤家 リビングとトイレ

帯の付いた100万円の束を10個重ねラッピングする美波と寛。

美波「連絡、こないですね」

寛も怪訝な表情で腕時計を見る。

寛「・・・そうですね」

寛のスマホがバイブする。

作業する美波に背を向け、画面を見る寛。

島川コメント『ガキが逃げるぞ』

寛「(美波に)ちよつとトイレに」

トイレに駆け込む寛。島川に電話する。

島川の声「ヨシ」

寛「(小声)逃げただと？」

*以下、カットバック

島川「ああ。犯人の1人と。家に来てた奴だ」

賢 川 「なんであいつが逃がすんだよ？」
島 川 「わかんねえよ。でも、ガキを助けてるって
感じだった」
賢 「仲間は？」
島 川 「2人いるけど、ぶっ倒れて呻いてる」
賢 「あいつが倒したってのか？」
島 川 「いや、あんなひ弱じゃ無理だろ。
何か病気っぽいぜ」
賢 「・・・だから交渉役が代わったのか」
島 川 「え？」
賢 「あいつは素人で、無理やりやらされてたんだ」
島 川 「無理やり？なあ、ガキが親の元に戻っちまうよ。ど
うする？」
賢 思案する賢。
賢 「いいか。よく聞け」

65 廃工場傍 運河に掛かる橋

賢 勇 次 「急いで！」
賢 「うん」
賢 橋の中央までやって来ると足を止め
呼吸を整える2人。
賢 振り返ると工場は遙か遠くに見える。
賢 「やったね！」
賢 次 「だね（笑）」
賢 安堵の息を吐くと上着を脱ぎ、
賢 賢に羽織ってあげる勇次。
賢 次 「ありがとう」
賢 賢 かじかむ両手に息を吹きかける賢。
賢 賢 「早く帰ってお母さんに謝んなきゃ」
賢 賢 次 「喧嘩した事？」
賢 「そう」

勇次「お母さん、凄く心配してたよ」
賢「え？」

勇次「逡巡する勇次。意を決し口を開く。」

君の家に行ってきたんだ」

賢「え？」

勇次「お母さんきつと喜ぶよ」

涙ぐむ賢。

賢「早く会いたいな」

勇次「・・・そうだ」

ガラケーを取り出す勇次。

66 遠藤家 リビング

寛が戻ってくると、一郎のスマホが鳴る。

美波「！」

一郎「！」

寛に目をやる一郎。

寛が頷き返すと、スマホを耳に当てる。

一郎「(出て)もしもし？」

賢の声「僕だよ！」

一郎「賢か！」

美波が一郎からスマホを奪い取る。

美波「賢！」

賢の声「お母さん！」

嗚咽を堪える美波。

美波「無事なの！？」

賢の声「うん。逃げてきた！」

美波「逃げた？今どこ！？」

寛「・・・」

*以下、カットバック

ガラケーを耳から離す賢。

賢「ここどこ？」

勇次「えくと」

電柱に貼られた住所を見る勇次。

勇次 「大田区〇〇―〇。〇〇橋の上」

賢 「えくとね、大田区の〇〇―〇。〇〇橋だって」

メモする美波。

美波 「？誰かと一緒なの？」

賢 「うん。お兄ちゃんと一緒に。だから逃げれた」

美波 「お兄ちゃん？と、とにかくそこになさい。」

迎えに行くから！

賢 「わかった」

***カットバック終わり**

スマホを一郎に戻す美波。

美波 「行きましょう！」

一郎 「あ、ああ」

上着を手にする美波と一郎。

一郎 「筧。お前も来てくれ」

美波 「どこにいる？」

美波 「大田区の〇〇橋です」

ふと考え、筧に目をやる一郎。

一郎 「でも賢の奴、なんで犯人の携帯から掛けてきたんだ？」

筧 「・・・」

美波 「(遮り) そんな事いいから！早く行きましょう！！」

ビニールでパックされた札束を

ダッフルバッグに押し込める一郎。

詰め終わるとバッグを持ち美波と共に出て行く。

筧 「・・・」

スマホを取り出す筧。

6
7
廃工場 中

鉄男 「むお？」

デスクに突っ伏した鉄男がゆっくり目を開ける。

辺りを見回し、トイレ前で赤子の様に

身を丸めた直也に目を留める。

鉄男 「おい・・・おい！」

直也が顔を上げる。

直也「鉄ニイ。大丈夫か？」

鉄男「名前呼ぶな・・・てか、あいつらは？」

鉄男が目をやると、シャッター脇の小さな扉が開きっぱなしになっている。

鉄男「？」

直也がヨロヨロ立ち上がると事務所に飛び込む。

直也「いねえ！」

鉄男「なに！？」

直也「逃げやがった！」

鉄男「まだ遠くにや行ってない筈だ。追うぞ！」

踏ん張って立ち上がる鉄男。

直也「おう！」

お尻を押さえ、トイレに駆け込む直也。

鉄男「おい！」

鉄男もお尻を押さえる。

鉄男「は、早くしろよ・・・」

68 運河に掛かる橋

座り込み、並んで座る勇次と賢。

賢「テストに関係がある、『10個』のお饅頭はなーんだ？」

勇次「お饅頭？うーん」

宙を見上げ思案する勇次。

賢「はい、時間切れ。答えは答案。10個の

『あん』だから」

勇次「(感心して)なるほど」

賢「やった！また僕の勝ち(笑)」

勇次「くっそお。これで俺、全敗」

賢「僕が勝ったから約束通り言う事聞いてよね」

勇次「ああ。いいよ」

賢「じゃあ欲しいサッカーゲームの

ソフトあるから買って」

勇次「え？(困惑して)・・・ああ、買える様に頑張るよ」

賢 「えー。すぐ買えるでしょ？ゲームソフトなんて」

勇 次 「（恥ずかしそうに）今、無職だからさ俺」

賢 「なんで？働けばいいじゃん」

勇 次 「（ズキッ！）人と付き合うのが苦手で。」

賢 「どこ行っても馴染めないんだ。」

賢 「だから働く事に戸惑いを感じるというか……」

賢 「そうかな？」

勇 次 「え？」

賢 「僕も友達いないけど、お母さんが言ってた」

勇 次 「？」

賢 「僕と仲良くなってくれない人は僕の事

ちゃんと見てくれてないから気にするなって。

ちゃんと見てくれる人は世の中に必ずいて

僕の事を理解してくれるって」

勇 次 「……」

賢 「僕はお兄ちゃんの事、凄くいい人だと思う」

勇 次 「！」

賢 身体を小刻みに震わす勇次。

賢 「どうしたの？」

勇 次 「……俺も賢君の事、凄くいい子だと思う」

賢 「えー嬉しい！！じゃあ僕ら友達だね」

勇 次 「うん。友達だね」

賢 辺りを見回す賢。

賢 「お母さん遅いなあ」

勇 次 「もうすぐ来るよ。あ、ジュースでも飲む？」

賢 「うん」

勇 次 「ちよつと待ってて」

賢 立ち上がり駆けていく勇次。

賢 勇次が置いていったトートバッグに

賢 目を留める賢。

賢 「……」

賢 そつと中を覗き、冊子（手作りの絵本）を

取り出す。目を通すなり、顔が明るくなり

賢 夢中で読み込始める。

× × ×

ホットの缶ジュースを2つ持ち、
戻ってくる勇次。

勇次「？」

さっきまで賢がいた場所にその姿が無く
冊子とトートバッグが転がっている。

勇次「賢君！？」

辺りを見回す勇次。
ガラケーが鳴る。

勇次「！」

画面を見ると見覚えのない番号。
震える手で通話ボタンを押す。

勇次「(息を呑む)も、もしもし？」

応答はない。

勇次「もしもし？」

島川の声「夕方6時までに手に入れる」

勇次「え？手に入れるってー」

島川の声「わかんذار？自分のやるべき事が」

勇次「(ハッとして)」

島川の声「今から言う事。必要な事だけメモしろ」

勇次「？」

69 道く運河に掛かる橋（*時間経過）

走るセダン。

ハンドルを握る一郎。

美波は助手席で落ち着かない。

ナビ画面から音声が流れる。

ナビ音声「間もなく目的地周辺です」

セダンが橋に差し掛かる。

美波「？賢はどこ？」

一郎「こここの筈だが」

橋の上に息子の姿が見えず、困惑する美波。
セダンが停車し、美波と一郎が降りる。
後部座席から寛も降りる。

美波「賢！賢！！」

一郎「どこ行ったんだ？」

美波「！」
一郎のスマホが鳴る。

一郎「(出て) はい」

美波が傍で聞き耳を立てると
緊張した息遣いが聞こえる。

美波「？」

一郎「？もしもし？」

勇次の声「・・・ガ、ガキは取り戻した」

一郎「なに！？」

美波「！！」

***以下、勇次とカットバック**

勇次「・・・逃げようとしたペナルティだ。
金を倍額にする」

辛そうにギョツと目を閉じる勇次。

一郎「！！」

勇次「1億用意しろ」

一郎「そんなに無理だ！！」

勇次「・・・急げ。金の受け渡しについてまた連絡する」
通話が切れる。

***カットバック終わり**

美波「どういう事！？」

一郎「どうもこうも、また攫われたんだよ！
しかも1億だと！？それにどうなってんだ！？
今のもさつきと同じ番号だぞ！？」

寛 助けを求める様に寛に目をやる一郎。

「そのお兄ちゃんてのが携帯を奪って子供と逃げた。
だがホシに見つかっちゃまった、てトコかもな」

美波「そんな・・・」

寛 「それより、ホシがまたどこかでも
こっちを見てるかも知れない」

一 郎 「あ」

寛 「俺はココを離れる。後は電話で連絡をとろう。

金を頼むぞ」

一 郎 「だが・・・」

寛 「子供の命が掛かってるんだ。だろ？」

一 郎 「美波がジッと一郎を見ている。」

一 郎 「・・・わかった。急いでおろしに行く」

その場を離れる寛の口の端が緩む。

70 道

勇 次 「・・・」
勇次がガラケーを耳から外すと深く息を吐く。

71 銀行前

セダンの助手席でジッとしている美波。
手提げ袋を提げた一郎が戻ってくる。

美 波 「大丈夫？」

無然とした表情で袋の中身を美波に見せる。

大量の帯封の付いた札束が覗く。

一郎のスマホが鳴る。

が、画面を見るとすかさず通話を切る。

美 波 「？犯人じゃないの？」

一 郎 「取引先だ。今はいい」

また一郎のスマホが鳴る。

美 里 「！」

通話をオープンにする一郎。

一 郎 「(出て) もしもし？」

勇次の声 「用意できたか？」

一 郎 「ああ。だが、この状況だ。レンガとやらにする
時間はないぞ」

勇次「・・・わかった。じゃあ、渋谷駅〇時〇分発
成城学園前駅行のバスに乗って
どこでもいいから座席に座れ」

一郎「バス？」

美波が一郎からスマホを奪う。

美波「そのバスに乗れば賢に会えるの!？」

勇次「え？」

美波「私も行きます。お金はちゃんと持っていくから
賢と会わせて!」

勇次「だ、駄目だ! こっちは父親と交渉してる。
父親だけ来い」

美波「？」

苦渋の表情の勇次。

勇次「えくと、バスには子供を乗せない。
別の場所にいる。言う通りにすれば居場所を言う。
だから父親に代われ」

美波「・・・」

落胆の表情で一郎にスマホを戻す美波。

一郎「もしもし？」

首の冷や汗を拭う勇次。

勇次「バスに乗ったら連絡するんで指示した場所で降りろ。
ただし、バッグは座席の下に置いたままだ」

一郎「置いたまま？」

勇次「金が入り次第・・・息子がいる場所を伝える」

美波がもう一度、一郎からスマホを奪う。

美波「もしもし!」

勇次「!」

美波「信じていいんですね？」

勇次「!・・・も、もちろんだ。あと、バスに余計な
人間を連れてくるなよ。見てるからな」

急いで通話を切る勇次。

勇次「はあ・・・」

罪悪感で項垂れ、口に入れたグミをガシガシ噛む。

7 3 運河に掛かる橋&同傍の道

一郎「くそっ」

寛の番号を鳴らす一郎。

× × ×

スマホを耳に当てている寛。

寛「・・・わかった。お前は先に行け。」

タクシーで後を追う

一郎の声「頼むぞ。1億も用意したんだ」

寛「わかってるよ。ホシも捕え、

金も無事に取り戻す」

通話が切れる。

寛は余裕の佇まいで島川を呼び出す。

島川の声「ヨシ」

寛「どうだ？」

島川の声「予定通り、放り込んでいた」

7 4 潰れたDVDショップ 前

停車したシボレーの運転席で電話する島川。

寛の声「俺が合図するまで見張っとけよ」

島川「わかった」

通話を切ると、入口に目をやる。

7 5 同 中

商品を失った棚が何列にも並んでいる。

その一角、手足を縛られ、目隠し猿轡を

された賢が横になり、怯えている。

7 6 駅前

セダンが停車する。

美波「何かあったらすぐ連絡して」

一郎「わかつてる」

助手席から美波を降ろし、発進するセダン。

美波「・・・」

7 7 ○○バス停

帽子を被った勇次が駆けてくる。

勇次「はあ、はあ」

時刻表に目をやる勇次。

不意に緊張に身を固める。

勇次「やっぱ無理だろ・・・」

× × ×

賢 「僕はお兄ちゃんの事、凄くいい人だと思う」

勇次「・・・」

腹を括ったようにグミを口に放る。

7 8 コインパーキング

上着を脱いだ一郎が駐車したセダンから降りる、
バッグを大事そうに抱え、駆け出していく。

7 9 渋谷駅 ローター

やって来たバスに一郎が乗り込む。

×

×

×

タクシーが停車し、笥が降りる。
バスを見つけると駆け出す。

80 遠藤家 傍く前

美波が帰ってくる。

美波「？」

家の前に若い女（若菜）が立っている。

美波「あの」

若菜が怒りにも似た目で美波を見据える。

美波「・・・」

若菜が提げたバッグに目を留める美波。

81 走るバス 車内

座席はほぼ埋まっており、立っている客が数名。

一郎は緊張の面持ちで右列後方の座席に座り
バッグを胸に抱えている。

笥は一郎の目の前の吊革に掴まっている。

周りの乗客を疑心暗鬼の目で見ている一郎。

やがて助けを求める様に笥をジッと見つめる。

視線を感じた笥が小さく首を横に振る。

それを受け一郎は俯き、ジッとする。

×

×

×

バス停①。

バスが停車し、乗降ドアが開く。

多くの客が乗車してくる。

車内は混雑状態に。

一郎「(息を呑み)」

×

×

×

バス停②。

停車するバス。乗り降りする乗客達。

一郎「……」

×

×

×

〇〇バス停。

停車するバス。降りる客達。

入れ替わる様に新たな乗客達が乗ってくる。

その中に帽子を被った勇次。

緊張した表情を隠す様に俯き、

運転席最寄りの吊革に掴まる。

勇次「(ドキドキ)」

さりげなく座席を見渡すと、

右列後方の席に目を留める。

勇次「！」

ガラケーをそっと取り出す。

×

×

×

一郎のスマホがバイブする。

一郎「(見て)」

ショートメールがきている。

『次で降りろ』

一郎「！」

落ち着かない様子的一郎。

我慢できず、辺りを見回すが

客のほとんどがスマホをいじっている為、

犯人を見分けられない。

× × ×

勇次「(ドキドキ)」
吊革に掴まり、窓外をジッと見ている勇次。

さりげなく目をやると
車内を窺う一郎と目が合う。

勇次「！」
咄嗟に目を外す勇次。

一郎「？」
一郎は他の乗客に気付かれない様に
胸に抱えたバッグを座席の下に忍ばせる。

勇次「(横目で見て)」
一郎が乗降ボタンを押す。
ピンポン♪【次、止まります】
無機質な音声が車内に響く。

× × ×

乗降ドアを閉め、出発するバスを見送る一郎。

× × ×

ガラケーに何かを打ち込む勇次。

× × ×

一郎のスマホがバイブする。
メッセージには住所だけが記載されている。

一郎「！」

× × ×

大きく息を吐き、一郎が座っていた
座席に向かう勇次。

緊張して足がおぼつかない。

勇次「ちよ、ちよっとすみません」

人込みに手間取る勇次。

座席に近づくと男（寛）が座っている。

勇次「！」

困惑する勇次。

それを見て寛が急に立ち上がる。

勇次「？」

無言で立ち上がり、座席を勧める寛。

勇次「・・・」

戸惑いながらも小さく頭を下げると

寛と入れ替わる様に座席に座る勇次。

寛が運転席傍の吊革に移動すると

スマホがバイブする。

寛「（見て）」

画面には一郎からのメッセージ。

一郎コメント『息子の場所がわかった。今向かってる』

返信する寛。

寛コメント『俺はホシを見つけてアジトを突き止める』

また一郎からコメントが来る。

一郎コメント『黒い帽子を被った男が怪しい』

寛コメント『わかった』

打ち終わるとスマホをしまう寛。

今度は島川にコメントを打つ。

寛コメント『金は手に入れさせた。父親がそっちに向かう』

×

×

×

シボレーの運転席でスマホに
コメントを打ち込む島川。

島川コメント『わかった』
シボレーを発進させる島川。

×

×

×

周囲を気にしながら、さりげなく座席下の
バッグを両足で挟み持ち上げる勇次。
少し屈み、腰下で掴むと抱える様に
胸元に引き寄せる。

勇次「(小声) うわ」

バッグの重さに驚きつつ、
心臓バクバクで降車ボタンを押す。

× × ×

バスが停車する。
バッグを抱え、降車口に向かう勇次。
ホッとした刹那、背後から声を掛けられる。

男の声「ちよつと」

勇次「！」

立ち止まる勇次。

ゆっくり振り返ると、吊革に掴まった

カジュアル姿の中年男が勇次に顔を寄せる。

男「それ、お宅の？」

勇次が胸元に抱えたバッグに目をやる男。

男「前のお客が忘れたモノでしょ？」

勇次「え？ いや・・・俺のです」

男「嘘ついちゃダメだよ。見てたから」

勇次「・・・」

男が離れたところで見ている。

男「・・・」

車内に運転手のアナウンスが響く。

運転手「お客さん、降りないんですか？ 出発しますよお」

『プシュー』ドアが閉まる。

勇次「あ」

再び走り出すバス。

男「そのバッグ、渡しなさい」

勇次「・・・あんたには関係ない」

男 「関係なくないんだよ」
勇次 「？」

男が勇次から顔を離すとポケットから何かを取り出す。

勇次 「！」

男 「非番中だろうが、犯罪は見逃せないんでね」

男が持つ警察手帳に蒼ざめる勇次。

車内が何事かとざわつき始める。

男 「さあ、寄越しなさい」

バッグに手を伸ばす男。

勇次 「！よせっ！！」

2人が揉み合い、車内が騒然とする。

男にバッグを奪われる勇次。

運転手 「お客さん！止めてください！！」

寛が運転手に駆け寄ると叫ぶ。

寛 「危ない！停めろっ！！」

運転手 「え！？」

条件反射でブレーキを

激しく踏んでしまう運転手。

バスが急停車する。

ポールにしがみつく寛。

勇次 「！」

他の乗客達 「うわああっ！！」

立っていた乗客たちが

押し寄せる波の様に一斉に倒れる。

勇次も男に覆い被さる様に倒れる。

男 「ぐあっ！！」

後頭部を痛打し、悶える男。

その手からバッグを奪う勇次。

乗客① 「痛い！！」

乗客② 「苦しうって！！」

車内が大騒ぎになる。

勇次 「あわわわ・・・」

出口を求めて車内を見渡すと後部座席右側に

【非常口ドア】とある。

男が後頭部を押さえながら立ちあがる。

男 「お前！」

再び勇次に詰め寄る男。

勇次は咄嗟にグミの袋を男の顔面に投げつける。

男 「ぶっ！」

撒き散らされたグミに男が一瞬怯む。

勇次はドア脇にある赤いカバーを開けると、

中にあるレバーを倒し非常口ドアを押し開ける。

男 「おい待て！」

非常口から飛び降りる勇次。

頭から血を流した男がスマホを取り出し

110番に掛ける。

男 「もしもし！！」

騒然とする車内。

寛 「(笑って)」

8 2 潰れたDVDショップ 表

タクシーが停車し、一郎が降りてくる。

8 3 同 中

飛び込んでくる一郎。

一 郎 「賢！」

8 4 遠藤家 2F 美波の部屋く1F リビング

自分の部屋から出ると、後ろ手で

ドアを閉める美波。

美 波 「・・・」

階段を降り、リビングに戻ると

ポケットのスマホが鳴る。

取り出して見た画面には一郎の番号。

美波「(出て)もしもし！」

一郎の声「美波」

美波「?どうしたの?賢は!？」

暫しの間。不安が募る。

賢の声「お母さん！」

美波「!!よかった。早く帰って来て」

嗚咽する美波。

85 潰れた車検場

バッグを抱え、汗だくの勇次が

息を切らせながらやってくる、

放置されたセダンに目を留める。

運転席を開け、トランクオープンで

トランクを開ける。

その中にバッグを置き、再び閉めると

その場を離れる。

×

×

×

寛「へっ」

右足を引き摺り、寛がやってくる。

開けたセダンのトランクからバッグを

取り上げると、物陰から勇次が現れる。

寛「・・・」

勇次「あんたは、バスにいた・・・」

苦笑いの寛。

寛「これ、落とし物みたいだな。警察に届けようと

思ってたんだ」

白々しく笑い、バッグを地面に置くと

煙草を啣え火を点ける。

勇次「・・・賢君は本当に無事なんですな？」

寛「賢君?誰だよ?」

勇次「惚けないでください」

仕方ない、といった風情で
煙を大きく吐き出す筧。

筧 「もう父親が回収してる。ていうか他人様のガキの
心配してる場合じゃねえだろ？」

勇 次 「？」

筧 「お前はやる事やっちゃまったんだ。

現金強奪ってヤツを」

勇 次 「！」

筧 「息子を取り戻した親は警察に

事件の事を通報するだろう。」

お前は捜査が自分に及ぶ前に逃げろ」

勇 次 「・・・」

筧 「一生な」

勇 次 「！」

勇 次 「俺は・・・やらされただけだ！」

笑う筧。

筧 「お前がやらされたって証拠は？」

勇 次 「それは、あんたの仲間から電話が来てー」

『身代金を手に入れる』。そう、具体的に言われたか？」

勇 次 「！」

筧 「箇条書きでメモを取る様に言われたろ？」

ポケットから（島川に指示された）

メモを取り出す勇次。

『・渋谷駅○○時発○○行に乗せる

・○○バス停で乗る

・○○で父親をバスから下ろす

・金を手に入れたら子供の居場所を伝える。

・子供の居場所は○○

・金は○○車検場』

箇条書きの文字が並ぶ。

「そりゃ、お前の計画書だよな？」

勇 次 「！ち、違う！」

「あ？じゃあ、お前が踊らされたって事実を

勇 お前はどうか証明する？」

次「！それは・・・」

短くなった煙草を地面に落とし、踏み潰す筈。

「出来ねえよな。あるのはお前が誘拐犯として

金を手に入れたって事実だけだ」

次「・・・」

「いいか？お前みてえな無力の若造がいくら警察で

無実を主張しても客観的証言・証拠が無きゃ

事実にはならねえ。それはお前の妄言に過ぎねえんだ。

警察だって、犯罪者が罪を逃れるために

バカな戯言言ってるんだ、としか受け取らねえ」

次「・・・」

「金を運んだ父親がバスでの件を話せば

居合わせた乗客の証言や街灯の監視カメラから

お前に辿り着くのは訳ない。

しかも警察官に顔をすっかり売ったよな？

そういった事実がお前を誘拐犯にするんだよ」

次「！」

「ついでに言っとくが、俺とお前の今のやりとりも

誰にも証言出来ない。ここには監視カメラもないしな。

俺はバスでの犯行を見てお前を追い詰めた。

そしたらお前が今言っていたいい訳をただけだ」

次「(蒼ざめる)」

「立証できるモンがなきゃ例えそれが事実でも

警察は動かない。起訴できる裏付けが無いんだからな」

次「！」

「わかったか？お前を知らねえ人間にとっちゃ、

お前に金を奪う意思が無かろうが、関係ねえんだよ」

次「！！」

新しい煙草を口に咥え、ライターを取り出す筈。

火を点けようとするがガス切れ。

『カチツカチツ』

やっと火が付き、煙を大きく吸い込む。

勇 次「・・・煙草、1本貰えますか？」

寛 「あ？」

ポケットから煙草のソフトケースを取り出す寛。

寛 「餞別だ。全部持ってけ」

煙草のケースと100円ライターを

勇次の足元に放る。

勇次 「・・・」

寛が放ったモノを拾い上げる勇次。

ケースから抜いた煙草を口に咥え、

寛同様やつと火を点けると大きく煙を吐き出し、

動悸を押さえようと努める。

寛 「おいおい。初めて吸うんじゃないやねえだろうな？」

くらくらは身体を揺らす勇次を見て笑う寛。

遠くでパトカーのサイレンが響く。

音の方へ目をやり、狼狽える勇次。

寛 「俺の知り合いで漁船やってる奴がいてな。」

そいつに頼めば東南アジア辺りに飛べるぞ？」

勇次 「！」

寛 「まあ、安くはない渡航費は向こう着いてから、

必死に働いて返してきやいい」

勇次 「・・・」

もう一度煙を大きく吸い込み吐き出すと

吸いかけの煙草を寛の胸に投げつけ

踵を返し逃げる勇次。

寛 「ま。捕まるなよ（笑）」

胸に付いた灰を払い、再びバッグを

拾い上げる寛。その顔が高揚で包まれる。

86 街

勇次 「・・・」

足早に歩く勇次。

行き交う人々の視線から逃れる様に

帽子を深く被り俯く。

目の前から自転車に乗った

勇次「！」

巡回中の制服警官がやってくる。

慌てて脇道に駆け込む勇次。

元いた通りを見ると自転車警官が横切っていく。

壁にもたれ、深く息を吐く。

87 遠藤家 玄関

賢 「ドアが開き、賢が飛び込んでくる。
お母さん！」

リビングから美波が飛び出してくる。

美波「賢！」

互いに駆け寄り、抱き合う母子。

開け放たれたドアの向こう、

一郎がそわそわしている。

一郎「なあ。ちょっと出てくる」

美波「？・・・どこ行くの？」

一郎「今日会社行けなかったろ？ちょっと顔出してくる」

美波「こんな時に？」

一郎「すまない。うちの連中も心配してるから」

急いで出て行く一郎。

美波「・・・」

88 タクシー車内

後部座席で電話している寛。

その傍らにはバッグ。

寛 「俺だ。金は用意出来たぞ」

電話の向こう、大沢が「ほう」と

驚きに似た声を漏らす。

寛 「明日の昼にでも持っていく」

大沢の声「オヤジには連絡しときますんで」

寛 「ああ」

大沢の声「改めて酒でも酌み交わしたらどうですか？」
笥 「心にもねえ事言うんじゃねえ。
ま、それも悪くねえけどな（笑）」

89 雑居ビル 前

タクシーが停車し、バッグを提げた笥が降りる。
建物の前にシボレーが停まっている。

90 同 4F 笥の事務所内

テーブル上のバッグとリボルバー。
その傍らに2つのグラスが置かれ
ウイスキーが注がれる。

島川 「じゃあ乾杯」
笥 「ああ」

ソファに横並びで座り、グラスを
カチンと合わせると一気に
飲み干す笥と島川。

島川 「凄え緊張したけど、やってみたらチヨロかったな」
島川がバッグを満足げに見つめ、
笥の肩に頭をもたげる。

笥 「ああ」

島川 「でも、危険な橋だったんじゃないやねえの？」
笥 「完璧にやっちゃダメなんだ。
俺らじゃない誰かが容疑者になるって事が
重要なんだからよ」

島川 「さすが。これで先輩の借金も返せるな」
笥 「そっちは返す気ねえよ」

島川 「え？」
笥 「て、浮かれて忘れてた」

テーブル上に置いた笥のスマホが鳴る。
画面を見て笑うと、それを取り上げる笥。

寛 「(笑) ちょうどいい。言い訳しとくか」

笑って通話をオープンにし、応答に出る寛。

島川はジッと息を殺す。

寛 「も、もしもし」

寛が突然、痛々しい声を出す。

一郎の声「寛？ どうした？ 今どこだ！？」

寛 「病院だ」

一郎の声「病院？」

寛 「すまない。ホシはお前が教えてくれた奴だったが

尾行中に気づかれちゃって」

一郎の声「なに！？」

寛 「逆に襲われて逃げられた」

一郎の声「お前が！？ 気弱そうな奴だったぞ！？」

寛 「油断しちゃった」

島川は吹き出しそうになるのを必死に堪える。

一郎の声「おい！ 何の為に前を呼んだと思ってるんだよ！？」

寛 「悪いと思ってる。子供は？」

一郎の声「(息を落ち着かせ) あ？ あいつは無事だ」

寛 「こうなったら警察に連絡しよう。」

早く見つければ金は全部取り戻せる」

一郎の声「全部じゃない」

寛 「あ？」

一郎の声「妻がおろした分だけだ」

寛 「なに？」

一郎の声「俺がおろした金は抜いたんだ」

寛 「！？」

無言でバッグのジッパーを開ける寛。

その目が大きく剥かれる。

寛 「！！！！」

中には3個のレンガとギッチリ丸められ、

ロープで結われた一郎の上着。

ロープを解き、上着を開くと

(車内にあった) 工具類やバッテリーが。

9 1 コインパーキング

- 一 一 一 一 一 一 一 一
- 「妻には言うなよ」
- スマホを耳に当てている一郎。
- 後部ドアを開けると座席の下、手提げ袋に
- 2個のレンガと帯封のついた
- 幾つもの札束が入っている。
- 一郎「俺は犯人を絶対に捕まえて妻の金も取り戻す。
- お前にも最後まで付き合っただけで貰うぞ」
- 寛の声「……わかってる。で、今どこだ？」
- 一郎「渋谷駅傍のコインパーキングだ。これから家に戻る」
- 運転席に乗り込む一郎。
- 一郎「お前も落ち着いたら家に来てくれ。
- そしたら警察に電話して来てもらおう」

9 2 寛の事務所

- 寛 「……わかった」
- 「スマホを床に叩きつける寛。」
- 島 川 「クッソがああっ！！」
- 島 川 「どういう事だよ！？」
- 寛 「車の中で金、間引きやがったんだ！」
- 島 川 「！？」
- 島川がバッグに手を入れレンガを3個
- テーブルの上に置く。
- 島 川 「これ、一つで1000万だろ？3つしかねえ」
- 寛 「あの野郎！いつまでもケチリやがって！！」
- 島 川 「……まあ、これだけ手に入れただけでも
- 良しとするしかー」
- 寛 「足りねえ！納得出来ねえ！！こんな無様で
- 終われねえだろ！！！」
- 寛がテーブルを激しく蹴り飛ばし、
- グラスやレンガが散乱する。
- 島 川 「ヨシ……」

寛のスマホが鳴る。

拾い上げ、画面を見て躊躇する寛。

諦めた様に苛立ちを押し殺し、応答に出る。

寛 「なんだ？」

大沢の声「オヤジが今すぐ持って来させろ、と言ってまして」

寛 「！」

大沢の声「来れますよね？」

寛 「……ちよつとトラブルがあつてな。

朝まで待ってくれ」

寛の耳に大沢が（会長と）話す声。

直後に怒声が響く。

息を呑む寛。

大沢の声「……それ以上はないですよ」

通話が切れる。

舌打ちする寛を心配そうに見つめる島川。

島川 「誰よ？」

応えず、険しい表情の寛。

寛 「仕方ねえ。やるぞ」

島川 「？またアイツ使うのか？」

9 3 カラオケBOX 外観

9 4 同 3F 個室

勇次 「フライドポテトのハーフを1つ」

壁に据え付けられた電話で注文する勇次。

電話機を戻すと財布の中身を見て溜息をつく。

勇次 「これじゃ遠くにも行けないし……」

ソファに沈み、テレビを点ける勇次。

ニュース番組を確認しては

チャンネルを切り替えていく。

と、その表情が強張る。

『今日の出来事』とテロップが載った画面に

バスの車内カメラの映像が映されている。

キャスターの声「本日午後3時過ぎ、東関バスの車内で窃盗及び乱闘騒ぎがありました」

勇次「！」

帽子を被った男（勇次）が男性と揉み合い、他の乗客達と雪崩の様に倒れ込む映像。

キャスターの声「乗客の証言によりますと他の乗客が

忘れたバッグを男が盗み、それを男性に咎められた際、揉み合いになり車内は

混乱に陥った模様です。男性は警官でー」

勇次の膝がガクガク震える。

煙草を乾いた口に咥え、火を点けようとする
とドアがノックされる。

勇次「ひっ！」

飛び上がる勇次。

トレーにフライドポテトを載せた

女性店員が入ってくる。

店員「お待たせしましたあ」

火の点いてない煙草を咥えた勇次が

テレビを隠す様に立ち、フリーズしている。

店員「？あの、室内での紙煙草はご遠慮頂いてるんですが」

勇次「・・・」

勇次の背後のテレビに目をやる店員。

映像は、男が非常ドアから飛び出す様子に切り替わる。

キャスターの声「帽子を被った男は緊急用の非常ドアを開け、

バッグを抱え逃走しました。一部乗客が

裂傷や捻挫などの軽傷を負った模様で

警察は窃盗・傷害事件とみて

男の行方を追っています」

店員がジッと勇次に視線を戻す。

勇次「！」

被っていた帽子を思い出し、咄嗟に脱ぐと
部屋を飛び出して行く勇次。

9 5 同 受付

会計を済ませ、表に飛び出す勇次。
入れ替わる様に店員がやってきて
会計をしていた店長に何か耳打ちする。

9 6 夜の公園

啜えてた煙草もどこへやら。
帽子をゴミ箱に捨て、息も切れ切れで
やってくる勇次。

トイレの個室に飛び込むと
蓋をした洋式便器に座り込む。

勇 次「はあ、はあ・・・」

目を閉じ、項垂れる。

勇 次「俺が誘拐犯。賢君を誘拐した男になっちゃうのか……」
自嘲気味に笑うと目を開く。

勇 次「・・・」

9 7 同 リビング

テレビを注視している美波。

画面の中、バッグを抱え逃走する

男（勇次）の姿を見て眉を潜める。

美 波「この子・・・」

窓の向こう、玄関先に人影を感じる美波。

美 波「？」

9 8 同 表

勇 次「・・・やっぱ駄目だ」

勇次が踵を返すと背後で

玄関ドアが開き、美波が顔を出す。

勇 次「（振り返り）！」

美 波「え」

対峙したまま、しばし見合う2人。

勇 次「あ……俺……」

美 波「……」

遠くでパトカーのサイレンが響く。

勇 次「！」

反射的に逃げ出そうとする勇次。

美 波「待って」

勇 次「？」

9 9 同 階段へ2F 賢の部屋 前へ中

階段を登る美波と後に続く勇次。

勇 次「突然すみません」

美 波「その声。電話で聞いたのと同じね」

勇 次「……あの、どうして？」

美 波「あなたを招き入れた事？」

勇 次「はい」

美 波「賢に会いに来てくれたんでしょ？」

賢の部屋前に立つ美波と勇次。

美 波「あの子と仲良くしてくれてありがとう」

勇 次「え？」

美 波「あの子がさっき言ったの。」

優しいお兄ちゃんが一緒だったから

怖くなかったって。だから今、ぐっすり

眠ってられてる」

勇 次「……」

ドアを薄く開ける美波。

その背後で勇次が中を窺う。

灯りの消えた室内、ベッドで賢が眠っている。

安堵する勇次。

美 波「そうだ。さっきまでお兄ちゃんの本が読みたかって
言ってたんだけど、わかる？」

勇 次「？」

慌ててトートバッグから冊子を出す勇次。

勇次「これですかね？」

美波「(見て) 絵本だって言ってたから多分そう。」

途中まで読んだんですって」

勇次「(嬉しくて)」

そっと賢の枕元に近づき、冊子を置く勇次。

100 同 リビング

ソファに座る勇次。

美波がその前に手作りのサンドイッチを置く。

勇次「え？」

美波「お腹、空いてそうに見えたから」

顔を赤らめる勇次。

勇次「い、頂きます」

サンドイッチに勢いよく齧りつく勇次。

美波「(微笑んで) 事情はわからないけど、本当の犯人にやらされたんじゃない？」

勇次「! . . . でも、その証拠は無いし

誰も信じてはくれません。きっと賢君も」

美波「. . . 」

勇次「でも、彼には信じて欲しくてここに来ました」

美波「. . . 」

大きく息を吐く勇次。

勇次「あの、聞いてもいいですか？」

美波「？」

勇次「昼間、どうして助けてくれたんですか？

あんな大金を知り合いでもない俺に」

美波「え？ ああ、私ああいうの大嫌いな」

勇次「え？」

美波「私の家、貧しくてね。お父さんが愛人作って

家を出てから、私とお母さん二人きりで生きてきたの」

勇次「. . . 」

美波「愛人だけでも頭にくるのに、借金まで作って

勇 次「……」
美 波「だから急いでたんだけど、昔を思い出したら

美 波「我慢できなくなってる」
勇 次「(頭を下げ) お、お金は必ず返しますから」

美 波「お金を稼ぐって大変よね」
勇 次「？」

美 波「私も今では料理研究家なんて行って

美 波「お金を稼げてるけど、それまで色んな仕事をやったわ」
勇 次「色んな？」

美 波「(頷き) 大学も行けなくて学歴も無いから

美 波「(頷き) 大学も行けなくて学歴も無いから
贅沢言ってられなかった。

美 波「やりたい仕事があっても就けずに悔しい思いしたわ。
当然生活は大変だったから、ネットオークションで

美 波「ポカンとしている勇次。」
美 波「?どうしたの？」

美 波「あ、すみません。そんな風に見えなかったんで」
美 波「(笑)人なんて見た目やイメージじゃわかんないわよ」

美 波「(笑)人なんて見た目やイメージじゃわかんないわよ」
勇 次「……でも、なんでそんなに頑張れたんですか？」

美 波「絶対に幸せになってやる。そう決めてたから」
勇 次「……」

美 波「絶対浮気しない旦那さんと結婚して、2人で
お金をたくさん稼いで。子供には絶対、

美 波「私みたいな不自由な思いをさせない。
勇 次「……」

美 波「……」
美 波「……」

美 波「他所に女の人作ってね。父親と一緒に。それから
軌道に乗りかけた今の仕事にのめり込んだわ」
勇 次「・・・」
美 波「で、今の主人と知り合ったんだけど・・・
ほんと、私は男を見る目がないみたい」
勇 次「？」

× × ×
若菜に詰め寄られる一郎。

勇 次「・・・」
美 波「あ、ごめんなさい変な事言っ

とにかく、お金には何一つ不自由しなくなったけど
あの子の気持ちを考えてやれなくなってた」
勇 次「・・・」
美 波「昨日も喧嘩しちゃって。あの子が起きたら謝るわ。
もう寂しい思いはさせないって」
勇 次「(笑って)」

× × ×
玄関ドアが開く音が聞こえる。

美 波「主人だわ」
勇 次「！！」
美 波「こっちに」

勇 次をリビングの隣、襖の向こうの和室に
押し込む美波。
美 波「タイミング見て、そっちのドアから行きなさい」
廊下に面したドアを示し、リビングに戻る美波。
襖が静かに閉められる。

美 波の声「お帰りなさい」
一郎の声「寛が犯人に逃げられた。こうなったら
警察に動いてもらう」

勇 次「！」

一郎の声「バスの件、知ってるか？」

美波の声「……ええ。ニュースで見たわ」

一郎の声「バスのカメラに犯人が映ってるから

捕まえるのは早い筈だ。絶対許さないからな」

勇次「(息を呑み)」

そつとドアを開ける勇次。

廊下に踏み出した足が物音を立ててしまう。

勇次「！」

息を止める勇次。沈黙……。

だが、襖が開き一郎が顔を出す。

一郎「！？」

勇次「いや、あの……」

ハッとする一郎。

一郎「その声、お前バスにいたろ！？」

一郎のタツクルを食らい仰向けに倒れる勇次。

勇次「ぐあっ」

一郎が勇次に馬乗りになり殴りつけようとする。

美波「待って！」

美波が一郎の腕にしがみつくが押し返される。

一郎「この野郎！金返せ！！」

一郎が拳を振り下ろそうとするとスマホが鳴る。

一郎「(出て) 覚。ちようど良かったー」

覚の声「(遮り) 一郎、気を付けろ」

一郎「なに？」

覚の声「今頃、ホシはお前が金を抜いた事に気づいてる筈だ」

一郎「だからどうした？」

覚の声「奴らが諦めると思うか？」

一郎「え？」

家中の電気が一齐に消える。

勇次「！」

一郎「なに！？」

美波「！！」

視界が奪われる勇次たち。

突然、勇次に跨っていた一郎がいなくなる。

勇次「！」

次の瞬間、

一郎の声「ぐあっ！」

暗闇の中、くぐもった声が聞こえる。

声「騒ぐなよ！」

一郎の声「なに？」

声「金はどこだ？」

勇次「？」

美波「？」

『ガシッ！』鈍い音が響く。

一郎の声「ぐあっ！」

美波「！」

勇次「！」

一郎がジタバタ暴れ回る音。

暗闇に目が慣れる勇次。

ニット帽を被り、鼻から下をハンカチで

覆った男に馬乗りされた一郎が

額を押さえ、悶えているのが薄っすら見える。

勇次「！」

美波も何とか視界を確保し始める。

美波「！」

ニット帽「素直に全部払わねえから痛い目みんだよ！」

勇次「？」

美波「？」

一郎「ぐうう・・・」

ニット帽「死ぬか？」

『ゴリッ』ニット帽が一郎の額に

S & W リボルバーを突きつけ撃鉄を起こす。

一郎「お、表のく、車だ！車の後部座席に！！」

目出し帽「キーを出せ！」

一郎がポケットからスマートキーを出す。

ニット帽がキーを奪うとその背後にいた

目出し帽を被った男に手渡す。

目出し帽は玄関を（足を引き摺りながら）

出て行く。

美波「(見て)」

ニット帽「全員、伏せて両手を頭の後ろに乗せろ！」

ゆっくり俯せる勇次たち。

と、階段の上から足音がする。

賢「お母さん？」

美波「賢！」

立ち上がり駆け出す美波。

賢も階段を下り、母の元へ。

ニット帽「！てめえっ！動くなっ言ってんだろ！！」

美波が賢を抱き締めた刹那、銃声が響く。

勇次「！」

賢を抱いたまま、廊下に倒れ込む美波。

ニット帽「ちっ！」

ニット帽が飛び出して行く。

勇次「ああっ！」

美波たちに駆け寄る勇次。

勇次「大丈夫ですか！」

美波は背中から血を流している。

賢が泣きじゃくる。

賢「お母さん！お母さん！！」

震える手でガラケーを取り出す勇次。

勇次「ああ、クソ！」

119番を押そうとするが上手くいかない。

一郎「あ、ああ・・・」

一郎は尻もちをつき、震えている。

勇次「電気を！」

一郎「お、お前じゃないのか？」

勇次「そんな事どうでもいい！！早く！！」

一郎「！」

壁沿いにリビングに向かう一郎。

119番を押す勇次。

勇次「今、救急車呼びましたから！」

美波「・・・こんな酷い事してお金を

勇 次「！！！」
手に入れて嬉しいのかな？」

101 走るシボレー車内

島 川「やったぞ、ヨシ！」
運転席でハンカチを外すハイテンションの島川。

助手席の寛も目出し帽を脱ぐが不機嫌顔。

寛 「お前、撃つちまったのか！？」

島 川「あ？急に動くから反射的にー」

寛 「馬鹿が！脅しだけにしろって言ったろうが！！」

島 川「馬鹿！？ヨシの為にやったんだぜ！」

そんな言い方ねえだろ！？」

寛 「・・・前見て運転しろ」

後部座席のバッグに2つのレンガと

大量の札束が詰め込まれている。

102 遠藤家 表 *時間経過

救急車やパトカー、野次馬で溢れている。

ストレッチャーに載せられた美波が出てくる。

賢 郎「お母さん！お母さん！！」

泣きじゃくり、母に付き添う賢と勇次。

勇 次「賢君」

「お兄ちゃん！誰なの！？僕を誘拐した

人たちなんでしょ？」

勇 次「・・・俺が協力なんかしなけりや」

賢 「え？」

疑いの目で勇次を見る賢。

賢 「お兄ちゃんのせいなの？」

勇 次「！！」

一 郎「行くぞ、賢！」

やってきた一郎が賢を促し

一緒に救急車に乗り込む。

出発する救急車を呆然と見送る勇次。

勇次「……」

警察官①が勇次の方へやってくる。

勇次「！」

警察官①「詳しいお話を聞かせて貰えますかね」

勇次「……」

×

×

×

遠藤家から少し離れた路地。

パトカーの後部座席で警察官①と隣り合わせで座る勇次。

警察官①「犯人の顔は見えてないんですね？」

勇次「……はい。暗くて」

警察官①「あなたはなぜ現場にいたんですか？」

被害者とはどういったご関係で？」

勇次「それは……？」

運転席の警察官②がジッと勇次を見ている。

警察官②「君、今日バスで窃盗しなかったか？」

勇次「(ドキッ)！」

警察官①「本当か？」

警察官②「今日、池上署の非番の警官が偶然

容疑者に遭遇しましたね。

服装と顔つきが彼の証言と同じなんですよ」

警察官①「……署で詳しく聞いた方がよさそうだな。

免許証出して」

勇次「！！」

遠藤家の方が騒がしい。

勇次「？」

勇次と警官たちが目をやると、遠藤家の

玄関から煙がモクモクと出ており

野次馬が騒いでいる。

警察官②「え！？」

警察官①「火事だ！！」

勇次「！！！」

慌ててパトカーから飛び降りると

家に向かっていく警察官。

勇次「なんなんだよ、これ・・・」

打ちひしがれ、項垂れる勇次。

後部ドアが勢いよく開く。

勇次「！？」

×

×

×

警察官①「なに！？」
野次馬を掻き分け玄関に飛び込む警察官①、②。

廊下に転がった消火器から白煙が噴出している。

103 近くの道

勇次「わっ！」
ワゴンの後部座席に放り込まれる勇次。

中では鉄男が待っている。

直也も後を追う様に乗込み、

兄弟で勇次を挟み込む。

勇次「ど、どうして？」

鉄男「『どうして？』じゃねえ、馬鹿野郎！」

直也がポケットナイフを勇次に突きつける。

直也「やっと思つたぞ、大馬鹿野郎！」

勇次「ちょ、待ってください！どうして？」

鉄男「免許証にあった、てめえのアパート行っても

姿見せねえし、ダメ元でここに来てみたら

この有様だ！」

直也「てめえ、俺らの事話してねえだろうな！？」

勇次「い、言ってますん！！」

鉄男「ニュース見たぞ！てめえ1人で

スケベりやがって！！」

直也「おとなしいツラして騙しやがったな！？」

104 夜の道

勇次「ち、違うんです！！」
鉄男「金はどこだ！？出せ！！」
勇次「ありません！」
鉄男「ああ！？てめえがやったんだろ！？」
直也「どういう事だよ！？」
兄弟に捲し立てられる勇次。イライラが募る。
勇次「き、聞いてくださいってえええっ！！！」
鉄男・直也「！？」

ワゴンがやってきて停車する。

後部座席から降り、煙草を吹かす鉄男。

勇次もトボトボ後に続く。

鉄男「なるほどな。そいつらが横取りしやがったのか」

直也が運転席から降りて舌打つ。

鉄男「たく、バスなんか使って危ねえ橋渡りやがってよ」

所在ない勇次。

鉄男「・・・まあ、それでもやりきるとはな」

勇次を見て軽く笑う鉄男。

鉄男「で？そいつら、俺らになりすまして家族を

襲撃したんだな？しかも値を釣り上げたただと？」

勇次「はい。倍の1億・・・」

直也「1億！？」

鉄男「(歯軋り)馬鹿が。で、父親が払うの

渋ってこの様かよ」

勇次を睨む直也。

直也「ちっ。お前がチビ連れて逃げ出さなきゃ

こんな面倒にはなあってねえんだぞ」

ムツとする勇次。

勇次「そもそも、あんた達が賢君と俺を

誘拐したからこうなったんじゃないすか」

直也が振り返り勇次を睨む。

直也「んだと！？」

勇次「(ビクッ)！」
鉄男「よせ！」

勇次を見て笑う鉄男。

鉄男「とにかく金を取り戻すんだ。お前もそうだろ？」
勇次「お金なんか要らないです」

鉄男「あ？」

勇次「ただ、あいつらは許せません」

勇次の怒りに包まれた目を見て笑う鉄男。

直也「でも鉄ニイよお。これからどうすんだ？」

鉄男「(勇次に) おい。奴らのヤサはわかんねんのか？」

勇次「ヤサ？」

鉄男「住所だよ。手掛かりくれえねえのか？」

思い出した様にガラケーを出す勇次。

勇次「向こうの番号が入ってます」

勇次からガラケーを奪い、履歴を開く鉄男。

勇次が示した発信履歴にある番号を

プッシュする。

呼び出し音が続くだけで応答は無い。

鉄男「やっぱ出ねえか」

直也「番号から洗うか？」

鉄男「いや、俺らと同じトバシだろうな。意味ねえ」

直也「けっ」

苛立つ表情で煙草を啜え、

100円ライターで火を点ける勇次。

鉄男「なんだ。禁煙中じゃなかったのかよ？」

鉄男に応えず、手元のライターを注視する勇次。

鉄男「おい？」

勇次「・・・」

勇次に煙草とライターを放る筈。

×

×

×

勇次「・・・」

100円ライターに店名『Thanatos』
と電話番号が記載されている。

105 スナック『Thanatos』 前々店内

島 筧 「じゃあコレ借りるぞ」
シボレーが停まり、運転席から島川が降りる。

島 筧 「お前は知らねえ方がいいんだ」

島 筧 「なあ。行先くらい教えてくれよ」

島 筧 「心配すんな。これで全部終わるからよ」

島 筧 「お前は知らねえ方がいいんだ」

直也「てめえで動かない、薄汚ねえ野郎を探してんだ」
島川「！？」

咄嗟に腹に挿したりリボルバーを抜き、
銃口を直也に向ける島川。

島川「何しに来やがった！？」

裏口の方から物音がする。

島川「！」

島川が銃口の向きを変えた刹那、
生ビール樽が飛んでくる。

島川「！」

『ドガンッ！』銃声と共に生ビール樽が
破裂する。

島川「！！」

飛散したビールを浴びる島川。

そこへ突然現れた鉄男が詰め寄ると

島川の額にチョーパンを決める。

島川「ぐはあっ！！」

勢いよく両膝が折れ、仰向けに倒れる島川。

鉄男がその手からリボルバーを奪う。

直也「あつぶねえなあ！バカ力がよお！！」

ビールを浴び、それを払う直也。

鉄男「手頃なのが無くてよ」

鉄男の背後から勇次が現れる。

島川「！？」

島川を顎で指す鉄男。

鉄男「こいつに見覚えあるか？」

首を横に振る勇次。

勇次「でも、電話してきたのはこいつ（の声）です」

×

×

×

顔を腫らし、鼻口から血を流した島川が
壁に凭れ掛かっている。

その傍ら、カウンターに腰掛けた

鉄男がおしぼりで拳の血を拭う。

鉄男「金はどこだ？」

島川「こ、ここにはねえ・・・」

鉄男「じゃあ相棒が持ってたんだな？どこにいる？」

島川「・・・し、知らねえよ」

鉄男「相棒とツルんで、このガキに身代金を奪わせたな？」

自分の傍らに立つ勇次を顎でこなす鉄男。

島川「けっ。証拠は？そのガキとお前らが

喚いたところで、どうにもなんねえだろが」

勇次「・・・」

鉄男の隣で瓶ビールをラッパ飲みする

直也が島川の免許証に目を通す。

直也「島川潔。俺らと同じムジナか？」

島川「お前らみてえなセコい犯罪者と一緒にすんな」

島川の顔面にケリを入れる直也。

島川「ぶはっ！」

勇次の足元に島川が仰向けで倒れ込む。

勇次「わっ！」

直也「誰がセコいつて？」

鉄男「こっちの質問にだけ答えろ」

天井を見上げ、荒い息の島川。

島川「だ、誰が言うかよ・・・」

鉄男「なら、お前の相棒に聞くとしよう」

直也「喋らせる前に殺しちまうかもだけどな」

ケラケラ笑う直也。

島川が震える身体をゆっくりと起こす。

島川「・・・あいつだけは見逃してくれよ」

直也「はあ？セコい横取り野郎にしちゃ、

随分友情に厚いじゃねえか」

上体を起こす島川。

島川「友情？そんなんじゃねえっ！」

勇次「？」

顔を見合わせる鉄男と直也。

直也「は？まさか愛してるとか言わねえよな？」
島川「・・・悪いかよ」
直也「はっ（笑）。悪かねえよ。このご時世だからな」
島川「んなモン関係ねえ！俺は男を愛してんじやなく、ヨシを愛してんだ！！」
直也「はあ」
鉄男「恋人はヨシってんだな？本名は？」
島川「・・・あいつだけは、頼むよ」
島川を無視した鉄男が勇次に目をやる。
鉄男「取引はお前1人でやれ」
勇次「え！？」
鉄男「ヨシってのは俺らの存在を知らない」
島川を顎でこなす鉄男。
鉄男「この野郎を餌に、取っ捕まえてボコる。倍返しだ！」
直也「・・・それ、古いつて」
赤面の鉄男。

106 走るシボレー 車内

鼻歌を口ずさみながらハンドルを握る
寛のスマホが鳴る。
画面には『キヨ』とある。
寛 「（出て）どうしたキヨ？」
応答が無い。息を呑む音が聞こえる。
寛 「？おい？どうした？」
勇次の声「島川潔を預かった」
寛 「！？お前！！」
*以下、勇次とカットバック
勇次「返して欲しけりやお金を渡せ」
寛 「てめえっ！ヤケクソで色気づきやがったか！？」
勇次「30分後。太田区。〇〇橋の上に来い。
お前らが子供を攫った場所だ」
通話が切れる。

*カットバック終わり

寛 「くそがあっ！」

ハンドルを殴る寛。

フロントガラスの向こう、雑居ビルの前に

大沢と真野が立っている。

寛 「・・・」

2人の前で停車するシボレー。

運転席の窓を開ける寛。

大 沢 「オヤジがお待ちです」

降りる気配のない寛を見て眉を潜める

大沢と真野。

真 野 「どうしたよ？」

助手席に置いたバッグに目をやり、逡巡する寛。

寛 「・・・少し待ってくれ」

アクセルを踏み込む寛。シボレーが急発進する。

真 野 「あの野郎！」

大 沢 「・・・」

107 運河に掛かる橋 傍

橋梁を見渡せる川沿いの道に

ハイエースがやってくる。

鉄 男 「ココで停めろ」

ブレーキを踏み、停車させる勇次。

鉄 男 「ここで野郎が来るのを待つ」

後部座席、2列目のシート。

啜え煙草でリボルバーを取り出す鉄男。

シリンダーを開き、空薬莖を1つ掌に落とす。

残り5つの穴の実包を確認すると

シリンダーを閉じる。

項垂れた島川を挟み、ガラケーで

ニュースサイトを見ていた直也が

驚きの声を上げる。

直 也 「おいおい！これ見ろよ（笑）」

勇 次 「？」

直也からガラケーを受け取る鉄男。
鉄男「(見て) ほお」

運転席の勇次も振り返る。

勇次「なんですか？」

鉄男が勇次にガラケーを差し出す。

勇次「(見て)！」

ガラケーの画面に(勇次が見た)

一郎と若菜の2Sが載っている。

『若手社長と新進女優の痴情！』

『不倫関係にあった2人が別れの喧嘩！！』

『彼女が押し返すバッグの中身は？手切れ金？』
とある。

鉄男「(勇次に) 奴らは、身代金が少ないって

言って襲撃してきたんだな？」

勇次「はい。『素直に払ってれば』って」

ガラケーに再び目をやる鉄男。

鉄男「だから父親は金ケチったのか」

勇次「？」

直也「あ？」

鉄男「幾らか知らねえが、女優に手切れ金

払っちゃったから、余計な出費を嫌ったんだ」

直也「嫌った？てめえの息子が攫われたのに？」

鉄男「親つてのはそんなモンだろ」

勇次「あの夫婦は再婚だそうです。あと、お父さんの
会社、実は火の車で大変みたいで」

驚いて顔を見合わせる仙道兄弟。

鉄男「お前、ちゃんと調べろよ」

直也「(恥ずかしそうに) お、俺のせいだよ！

ていうか、そんな記事適当な嘘かもしれないねえだろ！？」

鉄男「アイドルの熱愛は完全に信用してたじゃねえか」

揉める仙道兄弟。

勇次「！」

何か考えると、運転席から降りる勇次。

鉄男が見ると、勇次は何かを取り出し

スマホで電話を始める。

鉄 男「？」

ガラケーに夢中の直也を残し、
ハイエースから降りる鉄男。

通話を終えた勇次がスマホをしまう。

鉄 男「何してんだ？」

鉄 男「いや、何でも」

鉄 男「・・・お前、これが済んだらどうする？」

勇 次「・・・誘拐犯として動いたのは

まぎれもなく俺だから、警察行くしかないですよね」

鉄 男「・・・その、なんだ。俺の言う通りやってりや、

危ねえ事にやなってなかったのによ」

少しバツの悪い鉄男。

勇 次「まあ、俺の人生なんてこんなモンなんですよ」

煙草を地面に落とし、踏み潰す鉄男。

鉄 男「・・・てめえ、ムカつくな」

勇 次「？」

鉄 男「諦めの早え野郎だっつってんだよ」

勇 次「！」

鉄 男「今までも自分の現状を嘆いて勝手に腐って

地下深くに引き籠ってたんだろ？」

勇 次「(ムツとして)俺だっつて、どうしていいか

わかんなくて。けど、何とかしなきゃって

思ってますよ」

鉄 男「・・・」

勇 次「でも俺はこんな性格だから廻りから良く

見られないし。こうなったのも、自分のせいなんです」

大きく煙を吐く鉄男。

鉄 男「お前は自分の非を認める事で現実から逃げてんだ」

勇 次「え？」

鉄 男「反省するってのは聞こえはいいが、てめえの場合

そう思う事で自分に甘んじて全てを諦めてんだよ」

勇 次「！」

拳を握り込む勇次。

勇 次「あんたに何が分かるんですか？」

鉄 男「俺らもそうだったからだ。昔の俺ら見てるみてえでムカつくんだよ！」

勇 次「！」

ハイエースの後部ドアが開き直也が顔を出す。

直 也「何騒いでんだよ？」

鉄 男「なんでもねえ。ゴシップ記事見てろ！」

直 也「・・・はいはい」

ハイエースのドアが閉まる。

鉄 男「・・・不幸になる人間が100%

悪いなんて事はねえ。詐欺に遇う男、強姦される女、放火されて家失う奴。

自分のせいじゃなく、不幸な境遇に陥っちゃう奴はいる」

勇 次「・・・俺は、今の自分の話をしてんですー」

鉄 男「（遮り）その今のお前ってヤツを、形成したモノを

思い出せ。お前を捨てた親か？いじめた友達か？

陰險な先生か？振られた女か？」

勇 次「・・・思い出してどうすんですか？」

鉄 男「怒れ。怒って動け」

勇 次「動く？」

鉄 男「ああ、動け。綺麗事は要らねえ。てめえの事を理解しねえ他人のせいにして、

やる気が出んならそうしろよ」

勇 次「！」

新しい煙草に火を点ける鉄男。

鉄 男「俺ら兄弟もガキの頃、親に捨てられた」

勇 次「・・・」

鉄 男「そっからは地獄だ。親戚の家を転々とさせられまともに学校にも行けず、就職も出来ないで

ずっと底辺であがいてきた」

勇 次「・・・」

鉄 男「俺らはクソみてえな日々押し潰されて今まで生きてきたんだ」

勇次「……」
鉄男「俺らは、俺らをこんな目に遭わせた連中を

見返してえと思った。

だから動いた。……まあ褒められた

内容じゃねえがな」

勇次「……」

鉄男「で、てめえのお陰でとんだトラブルに

見舞われたが俺らはやる」

勇次「……」

×

×

×

美波「絶対に幸せになってやる。そう決めてたから」

×

×

×

勇次「……なんでそんなに頑張れるんです？」

鉄男「あ？ 幸せになりてえからに決まってるんだろ！」

勇次「……」

煙草を咥え、100円ライターを取り出す勇次。

『カチツカチツ』火が付かない。

勇次「……あの。お礼言う事があって」

鉄男「(ビックリして) お礼？」

勇次「ゆうべ、俺の事色々聞いてくれましたよね？」

鉄男「ん？それがなんだ？」

勇次「嬉しかったです」

鉄男「はあ!!？」

戸惑う鉄男。

鉄男「……ほらよ！」

自分のライターをぶつきら棒に

勇次に投げ渡す鉄男。

勇次「……ありがとうございます」

改めて火を点ける勇次。

大きく煙を吸うと、橋に目をやる。

勇次「！来ました！」
鉄男「！」

橋の向こうからシボレーが
やって来るのが見える。

煙草を捨て、勇次にリボルバーを握らせる鉄男。

鉄男「ヤバくなったら撃て」

ハイエースに戻り、3列目のシートで

直也と身を潜める。

勇次も急いで運転席に戻る。

鉄男「(勇次に) おい、言ったとおりにやれ」

直也「あの野郎、ボコボコにしてやる」

勇次が持つ島川のスマホが鳴る。

勇次「(出て) もしもし」

寛の声「着いたぞ。どうすりゃいい？」

勇次「橋の中央、欄干に寄せて停める。

エンジンは掛けたままだ」

シボレーが橋の中央、欄干よりで

ゆっくり停車する。

運転席。冷たい表情の寛。

寛「・・・」

ハイエースをゆっくり前進させる勇次。

後部座席で息を潜める鉄男と直也。

ハイエースがシボレーの対岸、

差し違う様に停車する。

勇次「こっちの車と交換だ。お金を持って降りろ」

通話を切り、ハイエースから降りる勇次。

その手にはリボルバーが握られている。

寛「・・・」

寛がバッグを手にシボレーから降りる。

勇次「か、鍵は？」

ポケットからスマートキーを取り出し、勇次に

見せると助手席を開け、ドアポケットに入れる。

続けてバッグを開き、中身を見せると

ボンネットの上に置く。

寛 次 「今度はそっちの番だ。相棒を見せろ」

勇 次 「……わかつてる」

鉄 男 「アイツが来たら同時に飛び掛かるぞ」

直 也 頷く直也。

直 也 「てめえ、俺らの事言ったらわかってんだろ？」

島川の後頭部を小突く直也。

勇次がハイエースの後部ドアを開ける。

寛 「！キヨ」

項垂れる島川のナリを見て拳を握る寛。

寛 「……お前が相棒をそんなにしやがったのか？」

勇 次 「え？……じゃあ交換だ」

勇 次 どちらからともなく互いの車に向け歩き出す。

寛 勇 次 「……」

寛 「……」

橋の中央、開いた距離で差し違ふ勇次と寛。

寛が横目で勇次を睨む。

寛 「タダじゃおかねえからな」

勇 次 「(ドキッ) え？」

寛が島川の前に立つ。

息を潜める仙道兄弟。

島 川 「ヨシ……」

寛 「大丈夫か？」

虚ろな顔を上げ、小さく頷く島川。

タイミングを計る鉄男と直也。

2人が飛び出そうとした瞬間、

寛が島川の手を取り、強引に引き摺り出すと

ポケットから出した丸めたティッシュを

車内の天井に向け、投げつける。

鉄男・直也 「？」

天井にぶつかったティッシュから

大量の粉が巻き散らかる。

素早く後部ドアを閉める寛。

直 也 「ゲホッ！ 痛え！！」

鉄男「コシヨウ！？唐辛子か！？」

バッグに手を掛けた勇次も振り返る。

勇次「？」

寛がスピアのスマートキーを取り出し、

シボレーのドアロックを掛ける。

寛「（島川に）走れ！」

島川が必死にシボレーに向けて駆け出す。

鉄男「野郎！」

涙目で咽び、探り探りでドアを探す鉄男と直也。

寛がポケットナイフを取り出す。

寛「馬鹿が、お見通しなんだよ！」

『バスッ』と鈍い音がし、車体が軽く揺れる。

鉄男・直也「！？」

息を吹き返した島川が勇次に迫る。

シボレーの運転席を開け、乗り込もうとするが

ロックが掛かって開かない。

勇次「くそっ！」

島川が勇次の後頭部を思い切り殴る。

島川「ガキがあっ！」

勇次「ぐあっ！」

両手で頭を押さえながら倒れる勇次。

島川がその手からリボルバーを奪い

右足を引き摺り、やっとなんて戻って来た寛に手渡す。

寛「てめえっ！死ぬ、ガキ！！」

勇次に銃口を向ける寛。

と、鉄男と直也がやっとの事で

ハイエースから出てくる。

寛「！」

寛は反射的に振り返ると鉄男たちに銃口を向け

2発連続で放つ。咄嗟に伏せる鉄男たち。

勇次は闇雲に転がり、シボレーの陰に逃げ込む。

寛「てめえっ逃げんな！！」

島川「行こうぜ！！」

寛はスマートキーでドアロックを解除し、

勇次が落としたバッグを掴むと
運転席に乗り込む。
島川も助手席に乗り込む。

108 同 傍の道

走行するシボレー。

寛 「ヨシ！大丈夫か！？」

島川 「・・・ああ」

寛 「これで全て終わり。俺らの勝ちだ」

寛 その眼前、リムジンが横腹を見せ急停車する。

寛 「！？」

急停止するシボレー。

リムジンから大沢と真野が降りてくる。

真野 「てめえっ！何やってやがんだ！」

腹に挿したグロックに手を掛ける真野。

バッグを手にシボレーを降りる寛。

寛 「待てよ！金ならここにある！！」

大沢 「・・・」
バッグのジッパーを開き、中身を見せる。

大沢 「・・・」
真野を従え、寛に近づく大沢。

寛 「待たせちまって悪かったな。」

ほらよ。1千万のレンガだ。4つ持ってけ」

寛がシボレーから手提げ袋を出し、

4つのレンガをバッグから移し替えると

大沢に渡す。

寛 「へ（笑）。これで終わったな」

大沢の合図を受けた真野が、寛の背後に回ると

腹から抜いたグロックを寛の後頭部に

突きつける。

寛 「！？」

大沢 「全部貰います。迷惑料ですよ」

寛 「！お前ら・・・」

島川がシボレーから慌てて降りる。

島川「ヨシ！」

大沢と真野の注意が一瞬、島川に向く。

寛「！」

その刹那、バッグを地面に落とした寛が

右肘を後ろに上げグロックを握る

真野の手首を上方に弾く。夜空に轟く銃声。

寛は振り返り様、尻のポケットに隠した

リボルバーを抜き、真野を目掛けて2発放つと

流れるような動きで大沢に銃口を向ける。

が、大沢が一瞬早く寛に向けてグロックを抜き、

引き金を引く。轟く2発の銃声。

寛の前に飛び出した島川が、胸に銃弾を受ける。

同時に銃弾を受けた大沢が手放した

手提げ袋と共に、後方に弾け飛ぶ。

寛「キヨ！」

横倒れになった島川を抱える寛。

だが、島川は目を見開き絶命している。

寛「おい！起きろ！！」

『ガラガラガラ』歪なエンジン音と共に

後輪がパンクしたハイエースが

ノロノロやってくる。

寛「くそがあっ！！」

バッグを掴み、シボレーに乗り込むと

ギアをバックに入れる寛。

シボレーは真野の死体を踏み越え、

ワゴン目掛けてバックで突っ込んでいく。

涙目でシボレーを見据える仙道兄弟。

鉄男「突っ込んでくるぞ！よける！！」

直也「何言つてんだ鉄ニイ！受けて立とうぜ！！」

鉄男「馬鹿！こっちはスピード乗ってねえんだぞ！！」

直也「あ！ごめん！！」

咄嗟にハンドルを切る直也。

シボレーのテールとハイエースの

フロントバンパー（角）が衝突する。

スピンし、停車するハイエース。
シボレーも弾かれる様にスピンし、
ガードレールに激突する。

寛 「ぐはっ！！」

ハンドルに突っ伏す直也。

直也 「て、鉄ニイ・・・大丈夫か？」

鉄男もダッシュボードから顔を上げ
ヘッドレストに頭をもたげる。

鉄男 「へ、平気だ。あの野郎は？」

エンジンをストップしたシボレー。

寛はそれを再スタートさせようと

スタートボタンを何度も押す。

寛 「動け！動けよ！！」

だが、エンジンは掛からない。

寛 「くそっ！！」

109 運河に掛かる橋

寛 「キヨ・・・」

バッグを抱え、力なく走る寛。

その顔にフラッシュが焚かれる。

寛 「！？」

光の方に目をやると、ガラケーを構えた

勇次が立ち尽くしている。

寛 「お前のせいだ。このガキが」

奥歯をギリッと噛み、怒りの目で勇次を睨む寛。

寛 「お前の役目はとっくに終わってたんだ。さっさと

どこへでも逃げときゃよかったんだよ！」

勇次 「そうはいかない」

寛 「あ？」

煙草とライターを寛の足元に放る勇次。

寛 「・・・」

勇次 「賢君とお母さんを傷つけたのは許せない」

寛がリボルバーを取り出す。

寛 「じゃあどうすんだ？俺を殺るってのか？」
 勇 「俺にそんな事は出来ない。」
 寛 ただ、あんたにも罰を受けてもらう」
 寛 「罰？どうやって？俺とお前しかいねえのに
 どうやって？」
 勇 「・・・」
 寛 「確かにお前に誘拐を実行させたのは俺だが
 逃げるのはお前だけなんだよ。」
 勇 言ったろ？事実なんか何も役に立たねえんだ」
 寛 「・・・ああ。事実なんかどうでもよくなった」
 勇 「？」
 寛 リボルバーを勇次に向ける寛。
 勇 「！」
 寛 「死ね」
 勇 引き金を引く寛。
 次 「！！」
 寛 『カチリ！』。
 寛 が勇次に迫り殴りつけると
 馬乗りになる。
 寛 「何もかも滅茶苦茶だ！死ねええっ！！」
 リボルバーのグリップで何度も
 勇次を狂ったように殴りつける寛。
 勇次は両手で顔をブロックするが
 額や頬、顎を痛打される。
 寛 「お前のせいでキヨも！死ねっ！！死ねっ！！！」
 勇 やがて勇次の首を絞める寛。
 次 「ぐううっ！！」
 必死に抵抗する勇次の首に寛の指が食い込む。
 勇 「！！！！」
 寛 「死ねえええええっ！！」

110 空港 ロビーく搭乗口（日替わり・朝）

多くの客で賑わう中、寛がベンチに

腰掛けている。

アナウンス 「釜山行き始発、KE772便ご搭乗のお客様は

15番搭乗口にお越しく下さい」

スマホを取り出し、ニュースサイトを開く筈。

キヤスター 『昨夜未明、大田区〇〇にて銃撃事件が

ありました。1人の銃殺された遺体が

見つかり、身元を調べたところ、飲食店経営の

島川潔さんと判明しました』

筈 「・・・」

キヤスター 『現場には、島川さんのものとみられる

血痕以外にも複数の血痕が見つかりましたが

遺体は島川さんのみでー』

気持ちは逸り、他のニュースを調べる筈。

しばらく見ると目を張る。

『ジャーナリスト 黒田甚平のスクープNOW』

の見出しと写真が現れる。

写真は暗がりの中、対峙する

2人の男を捉えている。

筈 「！」

写真を食い入るように見入る筈。

画面をスクロールすると、筈が勇次に

馬乗りになり、首を絞めている写真が現れる。

筈 「！！（呟く）あのガキッ」

その他にも

『青年を襲い、その身を海外に

売買する謎のブローカー』

『青年を襲っていた男は記者の車の音に

気付くと一目散でその場を後にした』

『裏に大きな闇組織の存在？』

『謎の殺人事件との関連は？』

筈 「！！人身売買！？適当謳いやがって！」

歯軋りする筈。

様々な見出しと共に目の部分にモザイクの

乗った筈の顔写真（勇次が撮ったもの）が。

「あ、あのガキは！？あいつの事じゃなく俺だけだど？」
「！」

× × ×

顔を伏せた寛がバッグを提げ、足早に歩く。
背後に気配を感じる。

寛 「(ビクッ)！」
立ち止まり振り返る寛。

男 「あの。誠にすみません。お客様のチケットを
確認させて頂けますでしょうか？」

寛 「あ？」
警戒し、男をジッと見つめる寛。

職員 「確認したい事がございました。
ご搭乗には間に合いますのでお願い致します」

職員 「どうぞ、こちらへ」

男が先導する。その後が続く寛。
フードを深く被った男が寛の背後に現れる。
寛の背中にサイレンサーを付けた銃口が
押し付けられ、軽い銃声。

× × ×

出口からフードが出てくる。
フードの歩く先、リムジンが停まっている。
後部座席の窓が開き、頭に包帯を巻いた
大沢がリムジンからバッグを受け取る。

包帯や絆創膏だらけの顔をした勇次が出てくる。
その向こうから黒田がやってくる。

黒田「やあやあ」

ペコリと頭を下げる勇次。

黒田「どうだい調子は？」

勇次「まあ」

黒田「電話来たときはビックリしたけどさ」

× × ×

橋梁を見渡せる場所。

ハイエースの外で電話する勇次。

× × ×

黒田「あんたのお陰で記事、大反響だよ」

勇次「見ましたけど、見出し大げさですよ」

黒田「いいんだよ。人身売買やってる野郎なんか。

しかも元刑事だろ？世間はそれで盛り上がる」

ポケットから名刺を取り出す黒田。

黒田「これ、新しいヤツ」

見ると『ジャーナリスト 黒田 甚平』とある。

黒田「今度、独占インタビューさせてくれよ。」

『人身売買組織に襲われた青年。その恐怖を語る』

つて感じでさ（笑）」

勇次「はあ」

黒田「ところで、あいつホントに人身売買やってんの？」

勇次「・・・だから連絡したんですよ」

黒田「まあ、いいか。悪党には違いねえから」

笑いながら去って行く黒田。

勇次「『その恐怖を語る』か。考えなえきや」

1 1 3 同 廊下→病室

小さな花束を手に歩く勇次。

病室を覗くとベッドの上に美波がいる。

美 波「(気づいて)」

ペコリと頭を下げ、美波の元へやってくる勇次。

勇 次「具合、どうですか？」

ベッドの傍らの椅子に腰掛ける勇次。

美 波「私は平気。そっちこそ大丈夫？」

勇 次「なんとか。さっき警察を出てきました。

・・・あの、賢君は？」

美 波「そろそろ学校終わって来る頃よ」

勇 次「そうですか・・・」

美 波「(笑って)私、あの子とやり直すわ」

勇 次「え？」

美 波「主人とは別れるの。賢には落ち着いたら話すつもり」

1 1 4 同 (回想)

ベッドの上で窓外を見つめる美波。

一郎が傍らの椅子に座り美波をジッと見ている。

一 郎「どうしても嫌だったんだよ。

悪党に金を全部くれてやるなんて」

美 波「女優さんには払うのに？」

一 郎「！」

一郎を見据える美波。

美 波「あなたがお金の受け渡しに行ってる時に来たわ」

×

×

×

美 波「！！」

テーブルの上に置いた一郎のスマホが鳴る。

美 波「なんで出ないの？犯人からでしょ？」

一郎「違う。会社の人間だ。放っておいていい」

×

×

×

美波を睨み、手にしたバッグを突き出す若菜。

×

×

×

美波「お金の入ったバッグを突き返された。

賢が誘拐された晩に渡したのね」

一郎「！」

×

×

×

一郎「遅れてすまない。

打ち合わせで都内にいなかったんでな」

×

×

×

一郎「……」

美波「『手切れ金なんて要らない』

私に『別れて貰えませんか？』だって」

一郎「……」

美波「彼女が持ってきたお金、私の部屋にあるわ。

少しはお金が戻って満足？」

一郎「き、聞いてくれ。彼女とはー」

美波「(遮り) 別れましょう」

一郎「！！」

115 病室

美波「……」

勇次「賢君ならわかってくれますよ」

美波「あなたの事もね」

勇 次「？」
美 波「今回のあなたの顛末、あの子には

全部黙ってるなんて出来ないから聞いてみたの。
『賢はあのお兄ちゃんの事、どう思う？』って」

勇 次「・・・」

美 波「あの子、『お兄ちゃんが悪い事するはずない。
僕はお兄ちゃんを信じる』って」

勇 次「！」

美 波「だから私もあの子が信じるモノを信じる。
周りがなんて言おうとね」

嗚咽を堪える勇次。

勇 次「・・・ありがとうございます」

微笑む美波。

美 波「だから、あなたが誘拐に
巻き込まれた事は秘密にしたのよ」

1 1 6 同（回想）

美 波「あと、あの青年とのバスでの出来事は忘れて」

一 郎「な！？何を？」

美 波「あなたのせいで私も賢も危険な目に遭った。

あなたには何も言う権利は無いわ。

彼はあなたの忘れ物を拾ってくれただけ。いい？」

力強く一郎を見据える美波。

1 1 7 元の病室

勇 次「・・・バスでの事も、弁護士さんを立ててくれた
お蔭で傷害の起訴猶予で出てくれました」

1 1 8 警察署 前

美波の声「警察に行って全て話しちやう前に

捕まえられてよかったわ」

意を決し、中に入ろうとする

勇次のガラケーが鳴る。

勇次「(出て) はい？」

美波の声「……今どこ？」

勇次「……」

119 元の病室

勇次「……ありがとうございます」

美波「あなたにやらせたのは、笈？」

勇次「……はい」

× × ×

(足を引き摺りながら) 出て行く目出し帽。

美波「(見て)」

× × ×

美波「(苦笑して) あいつの記事見たわ」

意味深に微笑む美波。

勇次「……どうしても、あいつが許せなくて」

美波「それに誘拐犯のレットテルもつけてやりましょう」

苦笑む勇次。

ランドセルを背負った賢が小走りにやってくる。

賢「！お兄ちゃん！」

勇次の元へやってくる

満面の笑顔を向ける賢。

勇次「(嬉しくて) 元気でよかった」

賢「あのね。お母さんがまたサツカーやっついていいって」

微笑み見合う母子。

賢「僕、絶対サツカー選手になるんだ」

勇次「(笑って) なるよ、賢君なら」

賢　大きく領き、冊子を出す賢。
賢　「これ、ありがとう。全部読んだよ。」
勇　「すつごく面白かった」
賢　次「ありがとう」
賢　「ねえ、他にないの？」
勇　次「え？最後まで作ったのはあれだけなんだ。新しく書いてるのがあるけど途中で」
賢　「なら全部書いてよ。それも読みたい！」
勇　次「・・・わかった（笑）」

120
同表

出てくる勇次の目の前、ハイエースが横腹を見せ急停車する。

勇　次「わっ！！」

スライドドアが開き、鉄男が顔を出す。

鉄男「ニュース見たぞ」

勇　次「え？」

運転席の直也が勇次を睨みつける。

直也「野郎に金、持ち逃げされやがってよお」

勇　次「そ、そっちも逃げられたでしょう？」

直也「んだと！？」

勇　次「（ビクッ）！」

鉄男「まあ。なんで、あいつが人身売買野郎

呼ばわりか知らねえが野郎は終わりだ」

勇　次「・・・」

勇次に厚めの封筒を持たせる鉄男。

勇　次「？」

鉄男「俺らの事、言ってねえみたいだな」

包みを開くと、万札の束が目飛び込む。

勇　次「え！？」

鉄男「これで終わりじゃねえ。てめえもそうだろ？」

ケラケラ笑う直也。

スライドドアが閉まり、ハイエースが

勇 次「……」
走り去っていく。

× × ×

直也「あげ過ぎじゃねえか？儲け少ねえんだからさ」
鉄男「まあ、あいつにはしょうがねえだろ。
俺らはほとんど何もせず、稼げたんだからよ」

鉄男が後部座席に目をやると手提げ袋が。
中にはビニールの破られたレンガが1つと
3つのレンガ。

1
2
1
公園（日替わり…昼）

ベンチに腰掛け、ノートPCで作業する勇次。
ゲートボールステイックを持った
畑老人と仲間たちが通り掛る。

勇 次「あ」

畑 「おや、今日は隠さないんだな」

勇 次「え？」

画面を覗き込む畑と仲間たち。

畑 「絵本作ってるのか。上手だね、プロの人かい？」

勇 次「いえ。ファミレスで働いてます」

畑 「へえ。そんな上手いんだから、

プロにでもなればいいのに」

『だな』『そうだよ』盛り上がる老人たち。

勇 次「（照れて）はい。プロを目指して頑張ってます」

笑顔の勇次。

画面の中、特徴的なイラスト

* 『架空の動物が太陽の下、同じ種族の仲間と
笑い合い、大空に向けて羽ばたいていく』

があり、そこに文章

* 『メロはくるしいたびのはてに

だ
い
じ
な
だ
い
じ
な
仲
間
を
み
つ
け
あ
た
ら
し
い
た
び
へ
た
び
だ
ち
ま
し
た
』

(終)